南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（18）

広田川遺跡
横峯B・F遺跡
一陣長崎鼻遺跡

－平成24年度町内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査報告書－

２０１６年３月
南種子町教育委員会

序　文

南種子町は種子島の南部に位置する町で，古代から黒潮を介した交流の中で豊かな歴史と文化を育んできました。県史跡横峯遺跡の発見により，３万年以上前から人間が生活していたと考えられ，先史時代の遺跡も数多く発見されています。

本報告書は，町内遺跡発掘調査等事業に伴い行われた３つの遺跡の調査結果をまとめたものです。広田Ⅲ遺跡は国史跡広田遺跡の西側丘陵地に位置する縄文時代，中世の遺跡です。平成２４年度，国史跡広田遺跡公園の整備に伴い，その一部が整備区域にかかることから再度確認調査を実施しました。

横峯Ｂ・Ｆ遺跡は，前述の横峯遺跡と近接した位置にある遺跡です。横峯一帯の台地は旧石器時代の遺跡が広がっている可能性があり，今後も注視すべき地域です。

一陣長崎鼻遺跡は縄文時代晩期の貝塚遺跡です。土器や石器，貝製品や骨角器に加え，種子島で最も古い時代の人骨が発見され，当時を知る上で大変重要な遺跡といえます。今回，新たに河川沿いの低地部に縄文時代前期の遺物包含層があるとこが明らかとなり，確認調査を行いました。

これらの調査成果を踏まえた報告書が，今後の調査・研究の一助となることを願うとともに，今後も本町の貴重な文化遺産である遺跡の保護・活用を図っていきたいと考えております。

最後に，様々な指導・助言いただきました鹿児島県文化財課，鹿児島県立埋蔵文化財センター，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター，ご指導やご協力いただきました諸先生方，地元のみなさまをはじめとする多くの方々にご協力いただきましたことに心よりお礼申し上げます。

平成２８年３月

南種子町教育委員会
教育長　遠藤　修

報告書抄録

ふりがな	ひろたⅢいせき，よこみねB・Fいせき，いちじんながさきばないせき
書名	広田Ⅲ遺跡，横峯B・F遺跡，一陣長崎鼻遺跡
副書名	平成24年度町内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	18
編集者名	小脇 有希乃
編集機関	南種子町教育委員会
所在地	〒891-3792 鹿児島県熊毛郡南種子町中之上2793-1 TEL 0997-26-1111
発行年月日	2016年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
広田Ⅲ遺跡 (ひろたさん)	鹿児島県熊毛郡 (かごしまけんくまげぐん) 南種子町大字 (みなみたねちょうおおあざ) 平山小字奥浜漁 (ひらやまこあざおくはまぎょ)	5020	81-73	130度 57分 58秒	30度 25分 26秒	20120801 ～ 20120817	117.5㎡	町内遺跡発掘調査等事業
横峯B・F遺跡 (よこみね)	鹿児島県熊毛郡 (かごしまけんくまげぐん) 南種子町大字 (みなみたねちょうおおあざ) 島間小字横峯 (しまま こあざよこみね)	5020	81-75	130度 52分 20秒	30度 26分 49秒	20120825 ～ 20120831	52.0㎡	町内遺跡発掘調査等事業
一陣長崎鼻遺跡 (いちじんながさきばな)	鹿児島県熊毛郡 (かごしまけんくまげぐん) 南種子町大字 (みなみたねちょうおおあざ) 中之下 (なかのした)	5020	81-5	130度 55分 35秒	30度 22分 26秒	20110912 ～ 20110914 20120904 ～ 20120914	800.0㎡	町内遺跡発掘調査等事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広田Ⅲ遺跡	散布地	縄文時代後期 中世		市来式土器，一湊式土器，青磁，近世陶磁器	閉史跡広田遺跡が近接
横峯B・F遺跡	散布地	縄文時代早期		土器	噴礫層を確認
一陣長崎鼻遺跡	貝塚	縄文時代前期	貝溜まり4基	轟B式土器，曽畑式土器，打製石鏃，磨製石鏃，磨製石斧，石匙，磨石，敲石	海岸砂丘の開語川沿いの低地に所在する貝塚。砂丘頂部には晩期の遺跡がある。

要約

広田Ⅲ遺跡の調査は，国史跡広田遺跡整備事業に伴い実施した確認調査である。調査の結果，遺跡の残存する範囲を確認した。

横峯B・F遺跡の調査は農政事業経営体育成基盤整備事業（通作）横峯地区に伴い実施した確認調査である。調査の結果，遺物包含層相当の層は残存したものの，土器が1点噴礫層から出土したのみで遺構・遺物は確認されなかった。

一陣長崎鼻遺跡は，種子島南部の海岸砂丘に所在する貝塚で，砂丘頂部地点は縄文時代晩期の人骨や土器，貝製品等多数の遺物が出土している。今回の調査地点は開語川沿いの低地で，Ⅲ～Ⅳ層で轟B式土器，Ⅱ層で曽畑式土器が出土している。石器は打製石鏃，磨製石鏃，磨製石斧，石匙，磨石，敲石が出土している。その他，ハマグリを中心とした貝類，サメ歯等の脊椎動物遺体等の自然遺物も出土しており，Ⅱ層では4基貝溜まりを検出した。Ⅳ層下部の轟B式土器で^{14}C年代測定を実施している。

例　言

1　本報告書は，平成24年度町内遺跡発掘調査等事業に伴い南種子町教育委員会が実施した広田Ⅲ遺跡，横峯B・F遺跡，一陣長崎鼻遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成24年度に実施した。平成23年度には，鹿児島女子短期大学竹中正巳教授と南種子町とで共同の確認調査を行っている。整理作業及び報告書作成は平成24・27年度に実施した。

3　本報告書に収録する発掘調査に関する遺物・発掘調査記録は南種子町教育委員会で保管する。

4　本報告書が用いる測量座標は平面直角座標Ⅱ系である。標高は海抜高である。

5　縮尺は挿図ごとに示す。

6　発掘調査における写真撮影は，石堂和博が行い，実測・測量は主として石堂・松原信之・山野ケン陽次郎（熊本大学大学院，当時）・西村綾乃・有木仁志が行った。整理作業は主として小脇有希乃・石堂・河北たける・小山綾で行った。遺物の実測・トレースは小脇・小山が行った。遺物写真撮影については，小脇が鶴田静彦（南種子町立西野小学校校長）氏に指導・協力いただき行った。

7　本報告書の執筆・編集は小脇が行った。

凡　例

貝製品の計測部位及び分類については，2003「種子島広田遺跡」に准ずる

1　貝輪計測部位

A（L／S）：内径（長径／短径）

B（L／S）：外径（長径／短径）

2　貝符計測部位

a（L／S）：縦の長さ（最大値／最小値）

b（L／S）：横の長さ（最大値／最小値）

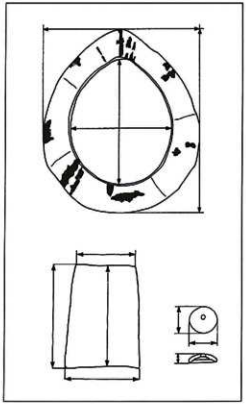
なお，縦・横の決定は遺物実測図の配置に基づく

3　イモガイ珠計測部位

径（L／S）：任意に計測した箇所とそこから

９０度ふった箇所の２箇所を計測

厚さ



目　次

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査の経緯

本報告書は，平成24年度の国宝重要文化財等保存整備費補助金で南種子町が実施した，町内遺跡発掘調査等事業の発掘調査，一陣長崎鼻遺跡，広田Ⅲ遺跡，横峯B・F遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

一陣長崎鼻遺跡は，種子島の南部，太平洋に面した砂丘海岸上に位置する縄文時代晩期の貝塚遺跡で，町の選定文化財となっている。昭和29年に発見され，昭和31年に盛園尚孝氏（中種子町野間中学校教諭，当時）により発掘調査がなされた。平成19～21年度にかけて保存を目的とした範囲確認調査を実施し，平成22年度に調査成果の整理，報告書の作成を行った。今回の調査は，平成23年6月の大雨で壁面が崩落した，遺跡より約50m内陸側の河川沿いの地点で縄文時代前期の土器が確認されたことによる，遺跡の保護を目的とした緊急調査である。

平成23年度，土器を採集した地点を中心にトレンチ（2011-1，2011-2トレンチ）を設定し，試掘調査を行い，翌年には近接して1箇所（2012-1トレンチ）を設定し，確認調査を行った。調査の結果，轟B式～曽畑式土器を中心とした縄文時代前期の包含層を確認した。このことから，一陣長崎鼻遺跡は周知の遺跡として確認されていた砂丘段丘上以外に，内陸部の河川が蛇行する低地上に縄文時代前期の貝塚が存在することが明らかとなった。

広田Ⅲ遺跡は，国史跡広田遺跡の西側丘陵部に位置する，縄文時代後期～晩期，中世の遺跡である。平成15～16年度に遺跡周辺の確認調査を実施している。平成24年度から，国史跡指定を受けて広田遺跡の整備事業を実施するにあたり，整備区域に隣接する当遺跡の範囲確認調査を実施するものである。

6箇所トレンチを設定し，確認調査を行った。調査の結果，遺跡の範囲を確認することができ，遺跡の整備事業対象区には遺物包含層がないことが明らかとなった。

横峯B・F遺跡は，西海岸の海岸段丘により発達した八手状を呈する台地に位置する遺跡で，旧石器時代の県指定史跡，横峯遺跡の北側に位置する遺跡である。平成22年度，経営体育成基盤整備事業（通作）横峯地区に伴い分布調査を実施し，周知の埋蔵文化財包蔵地であった横峯B・F遺跡の試掘・確認調査を実施するものである。

12箇所トレンチを設定し，確認調査を行った。調査の結果，縄文時代早期に相当する層の堆積は確認できたが，遺物は噴礫層から土器が1点出土したのみであった。

第2節　調査の組織

調査主体	南種子町教育委員会
調査責任者	南種子町教育委員会教育長
	岩屋　秀男（平成23-24年度）
	遠藤　修（平成27年度）
事務担当	南種子町教育委員会社会教育課
	文化係学芸員　石堂　和博
	文化係　日高　愛美
調査担当	文化係学芸員　石堂　和博
整理担当	文化係学芸員　小脇　有希乃
協力機関	鹿児島県教育委員会
	鹿児島県立埋蔵文化財センター
調査・整理指導	
	公益財団法人鹿児島県文化振興
	財団埋蔵文化財センター
	センター長　堂込　秀人
	鹿児島県教育委員会文化財課

中村　和美（平成24年度）
鹿児島女子短期大学
教授　竹中　正巳
千葉県立中央博物館
主任学芸員　黒住　耐二
早稲田大学非常勤講師
樋泉　岳二

なお，発掘調査・整理作業において下記の方々にご教示・助言をいただいた。記して謝意を表したい（順不同，敬省略）。
大西智和，山野ケン陽次郎，鶴田静彦

第3章　発掘・整理作業の経過

1　発掘作業の経過

発掘作業従事者（平成23年度）：
柳田弘
発掘作業従事者（平成24年度）：
柳田弘，中脇敏光，行廣保成，河北たける，佐々木ふさ子，山下トネ子，峯山鈴子，立石ときえ，河北かおり，西村綾乃（鹿児島国際大学4年生，当時），有木仁志（鹿児島国際大学3年生，当時）

調査日誌抄
平成２３年度
■一陣長崎鼻遺跡
9月12日
鹿児島女子短期大学竹中正巳教授来島。
重機による表土除去を行う。調査区域を設定し，掘り下げを開始する。
9月13日
2011-1Tに隣接し2011-2Tを設定し，掘り下げを行う。
9月14日
土層断面等の図面作成等を行う。重機による埋め戻しと並行し，大型土嚢を設置して保護を行う。調査終了。

平成２４年度
■広田Ⅲ遺跡
8月1日
台風10号接近のため，天候をみながらの作業となった。初日はオリエンテーションを行い，その後草払い機，鎌，鉈などで調査区及び周辺の伐採を行った。
8月2日～3日
トレンチの設定後，重機で表土を除去し，下位は人力での掘り下げを行った。2012-3トレンチで土器片が出土。ほかのトレンチは，攪乱を受けているものが多く，サブトレンチを入れて確認を行った。
8月6日～9日
各トレンチ，人力での掘り下げを行う。旧水田地に設定したトレンチは，水が湧き出てきたため，水中ポンプを設置して掘り下げを行った。
8月16日～17日
各トレンチの掘り下げと並行し，土層断面などの図面作成を行う。調査終了。

■横峯B・F遺跡
8月25日
台風１５号接近に伴い，調査はせず道具の確認，調整を行う。
8月２８日
草払い機等で調査区及び周辺の伐採を行った後，支線8号～10号それぞれにトレンチを設定し，重機で表土を除去する。2012-8-3トレンチ設定の際，スズメバチの巣があり，駆除を行った。
8月29日～30日
2012-8-3トレンチ，2012-10-2トレンチは，人力での掘り下げを行った。2012-8-3トレンチで，噴礫層の中から土器片が出土したため，

周辺にトレンチを追加設定し，確認調査を行う。

8月31日

各トレンチの写真撮影，図面の作成等を行い，重機で埋め戻しを行う。調査終了。

■一陣長崎鼻遺跡

9月4日～5日

調査区設定。発掘調査機材等準備，搬入。重機による表土除去開始。

9月10日

重機による表土除去。基準杭等の設定。表土除去が終わった地点からトレンチを設定し，人力での掘削開始。2011-1トレンチを確認し，隣接して2012-1トレンチを設定。

9月11日～13日

竹中，黒住，樋泉各先生に指導いただく。コラムサンプリング等を行う。大西先生，山野氏調査参加。平面図や土層断面図，出土状況図等を作成。

9月14日

重機による埋め戻し。記録保存及び現場撤収。壁面崩壊防止のため，大型土嚢で補強した。

2 整理作業の経過

整理作業従事者（平成24年度）：河北たける

整理作業従事者（平成27年度）：小山綾

平成24年度は，12月1日～3月15日まで整理作業を行った。出土した遺物の注記，整理等を中心に，サンプリングした土壌のフローテーションも行っている。

平成27年度は，報告書刊行に伴う整理作業を行った。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　自然環境

種子島は，大隅半島最南端の佐多岬から南東約 40km の洋上にあり，面積 447.09 ㎡，南北 52km，東西 12km の縦長の島である。最高海抜は 282.3 m で，海を挟んで対面する屋久島と対照的な平坦な島である。

黒潮の影響を受けた亜熱帯性の自然環境で，東海岸にはマングローグやサンゴ礁がみられる。特に，メヒルギ群落は種子島が自然植生の北限といわれ（目崎 2003），サンゴ礁についても北限とされている（中井 1990）。

種子島を東西方向に走る断層により北部，中部，南部で地質構造が異なる。南種子町では，西海岸から南部にかけての東シナ海に面する地域では，海岸段丘が発達し台地を形成しているが，太平洋に面する東海岸側は河川の発達による沖積平野が広がっている。

広田Ⅲ遺跡は，熊毛郡南種子町大字平山字奥浜渡に所在する。広田海岸は太平洋に東面し、弧状を描く海岸線の広田川と阿武鋤川とに挟まれた、ポケットビーチとなっており、沖合にはサンゴ礁が広範囲にわたり発達している。国史跡広田遺跡は広田海岸の北端部、海岸線から約 50 m の海岸砂丘に立地しており，広田Ⅲ遺跡はさらに西側内陸部に入った丘陵地に位置する。

横峯 B・F 遺跡は，熊毛郡南種子町大字島間字横峯に所在する。南種子西北部の海岸段丘上に八つ手状に発達した台地上に位置し，国道 58 号線を挟んだ台地には，旧石器時代の礫群が検出された県指定史跡横峯遺跡がある。

一陣長崎鼻遺跡は，熊毛郡南種子町大字中之下字一陣に所在する。種子島南部の太平洋に面した海岸砂丘上に位置し，間語川が緩やかに砂丘を周り込む形で海へと繋がる。この間語川が砂丘により遮られているため，背後に後背湿地が形成されており，広田遺跡の立地状況に似ている。今回調査した縄文時代前期の地点はこの間語川沿いの低地に位置する。

第２節　歴史的環境

種子島は，琉球列島の北端に位置する。琉球列島は，洋上に連なる島々の総称で，その距離約 800km にも及ぶ。その文化は，考古学の観点から，以下３つに区分されている。（国分 1972）

北部圏：大隅諸島，トカラ列島
中部圏：奄美諸島・沖縄諸島
南部圏：宮古・八重山諸島

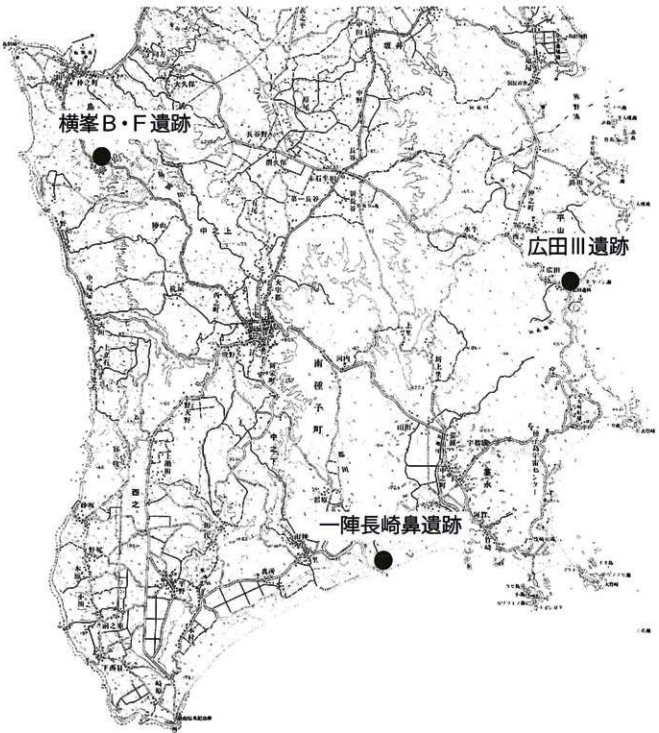
北部圏は九州島に最も近く，その影響が色濃く残る文化を形成し，中部圏は，その影響を受けつつも独自の文化を形成している地域で，南部圏は地理的にそうした影響はほとんど及ばず，台湾やフィリピンなど南方文化の影響が強くみられる文化を形成している。

種子島は，種子島・屋久島からなる大隅諸島に入り，北部圏にあたる。以下，種子島の遺跡を時代ごとに記述する。

旧石器時代

南種子町島間の横峯遺跡（横峯 C 遺跡）の調査により，種子島において旧石器時代の遺跡の存在が明らかになった。AT 火山灰，種Ⅳ火山灰，種Ⅲ火山灰等の時代を特定できる火山灰に挟まれて遺物包含層が確認され，後期旧石器の礫群や敲石などの遺物が出土している。同時期の遺跡として中種子町立切遺跡，大津保畑遺跡がある。両者は近接しており，中種子町の行った立切遺跡範囲確認調査で立地する台地一帯に遺跡が広がると想定されている。

細石器文化の遺跡としては，南種子町銭亀遺



第１図　遺跡位置図　S=1/30,000

跡で船野型の細石核や細石刃が出土しており，細石器文化最南端の遺跡として その遺物が今年度，県指定を受けた。その他，西之表市湊遺跡，大中峯遺跡，中種子町三角山遺跡，立切遺跡でも細石核が確認されており，種子島一帯に細石器文化が広がっていたと考えられる。

縄文時代

草創期の遺跡としては，南種子町では横峯C遺跡，横峯D遺跡で隆帯文土器が出土している。西之表市奥ノ仁田遺跡や鬼ヶ野遺跡，中種子町三角山遺跡でも隆帯文土器が出土している。中でも，鬼ヶ野遺跡や三角山遺跡では竪穴式住居跡が確認されており，多数の遺物を含め，この時代の様相を知る上で注目される。

早期の遺跡は種子島全域に多く確認されている。中には，下剥峯遺跡や苦浜貝塚など土器の標識遺跡となっているものもある。南種子町では，岩本式土器の出土した上平遺跡，吉田式土器の出土した長谷遺跡，塞ノ神式土器の出土した小牧遺跡，石ノ峯遺跡，苦浜式土器の出土した枯木野隅遺跡のほか，穿孔のある魔製石鏃の出土した龍庵坂遺跡，今平遺跡などがある。

前期は轟式土器の出土した下剥峯遺跡，大園遺跡，曽畑式の出土した二十番遺跡，千草原遺跡などがあり，南種子町でも轟式土器の出土した上平遺跡のほか，平六間遺跡，赤石牟田遺跡がある。

中期は遺跡の数が減少する傾向にあるが，春日式土器の出土した中種子町宮田遺跡や西之表市下剥峯遺跡がある。

後期になると遺跡の数が増え，指宿式土器の出土した西之表市大花里一ノ鳥居遺跡や中種子町梶ノ本遺跡，大園遺跡，市来式土器や丸尾式土器の出土した西之表市奥嵐遺跡などがある。南種子町でも茶木久保遺跡，田尾遺跡，松原遺跡などのほか，この時期の大隅諸島の特徴的な一湊式土器が出土した単純遺跡野大野遺跡もある。また，南種子町鳥間の藤平小田遺跡では，大規模な配石遺構と多量の遺物が出土しており，環状列石の可能性を指摘されている。

晩期の遺跡としては，黒川式土器や人骨，貝製品の出土した一陣長崎鼻遺跡や松原遺跡などがある。

弥生時代～古墳時代並行期

この時期の代表的な遺跡としては，弥生時代終末～古墳時代にかけての集団埋葬址，国史跡広田遺跡がある。150体以上の埋葬人骨とそれに伴う南海産大型巻貝等を使用した貝製品が多量に出土した。このほか，縄文時代晩期～弥生時代の生活址と思われる中種子町阿獄洞穴，上能野式土器の標識遺跡である西之表市上能野貝塚のほか，中種子町鳥ノ峯遺跡や西之表市馬毛島埋葬址では埋葬遺構が確認されている。

古代～中世

古代については，多禰国の国府，国分寺があったと考えられているが，その所在地については諸説あり，現在も明らかになっていない。この時期の遺跡としては，南種子町松原遺跡，本村丸田遺跡，一ノ坪遺跡，日ノ丸遺跡などがあり，土師器，須恵器のほか，越州窯青磁などの輸入陶磁もみられる。

(引用文献)

国分直一 1972『南島先史時代の研究』慶友社

中井達郎 1990「北限地域のサンゴ礁」『熱い自然　サンゴ礁の環境誌』古今書院

目崎茂和 2003「地理的環境」『種子島　広田遺跡』広田遺跡学術調査研究会ほか

南種子町郷土史編纂委員会 1987『南種子町郷土誌』

第Ⅲ章　発掘調査の成果

第１節　調査の概要

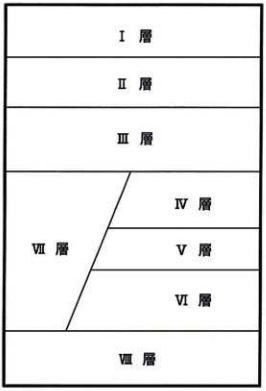
広田Ⅲ遺跡は，平成 15 年度に鹿児島大学埋蔵文化財調査室の協力のもと行った試掘調査と平成 16 年度の国庫補助町内遺跡発掘調査等事業での確認調査により，縄文時代後期～晩期，中世の遺物包含層があることを確認している。今回，国史跡広田遺跡の整備計画が遺跡想定範囲にかかるため，詳細な範囲確認調査を実施することとなった。

以前の調査で設定していない地点に 6 箇所トレンチを設定し，確認調査を行った。調査にあたっては，事前に草払い機等を用いて周辺の草払いを行った後，重機で表土を剥ぎ，以下は人力での掘り下げを行った。河川に近い場所であったため，調査中に水が湧いてきたトレンチは水中ポンプで水を汲み出しながら調査を行った。

調査期間は平成 24 年８月１日～８月 17 日の実働９日間で，調査面積は 117.5 ㎡である。

第２節　層位

標準土層を，2012-4 トレンチをもとに示す。



第2図　基本土層図

Ⅰ層　表土

Ⅱ層　褐灰色シルト質細砂層：現水田面

Ⅲ層　褐灰色シルト質砂層

：水田造成層，近代以降の陶器を含む

Ⅳ層　褐色粘質土層

：造成層，近代以降の陶器を含む

Ⅴ層　暗褐色粘質土：中世遺物包含層

Ⅵ層　にぶい黄褐色粘質土層

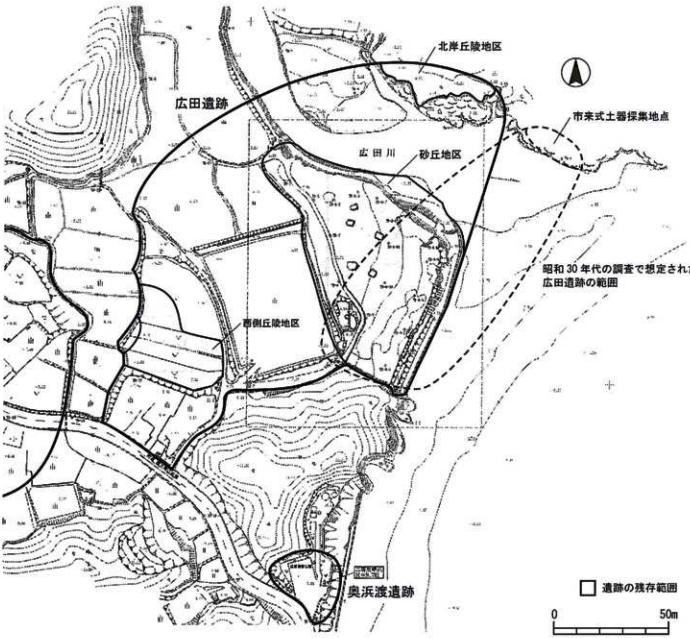
：縄文時代後期～晩期の包含層

Ⅶ層　褐灰色粘質土層

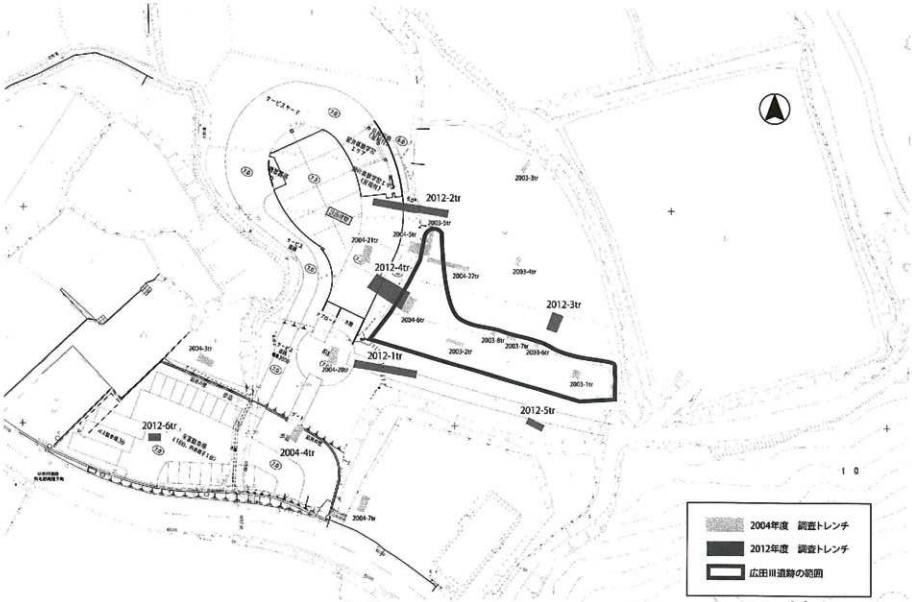
：無遺物層　グライ化がすすむ

Ⅷ層　黒褐色シルト質砂層

：無遺物層，流木，1cm 大小石を含む



第3図　調査前の周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲
※広田Ⅲ遺跡＝西側丘陵地区
※2008年　広田遺跡報告書より引用



第４図　トレンチ配置図　S=1:500

第３節　遺構・遺物

各トレンチの調査成果は，以下のとおりである。

2012-1 トレンチ

攪乱層を除去したところ，すぐに地山が検出された。攪乱層から土器等の遺物は出土したが，遺物包含層は確認されなかった。

2012-2 トレンチ

攪乱層を除去したところ，すぐに地山が検出された。攪乱層から土器等の遺物が出土したが，遺物包含層は確認されなかった。

2012-3 トレンチ

攪乱層を除去したところ，すぐに地山が検出された。攪乱層から土器片が確認されており，畑の造成等により遺物包含層が滅失したと考えられる。

2012-4 トレンチ

このトレンチは，台地上にある畑と一段下がった水田とをまたがって設定した。畑側部分で中世及び縄文時代後期～晩期の遺物包含層が確認された。水田部分は水田造成により削平されており，遺物包含層は残存していないことが明らかとなった。中世の包含層はⅤ層で，青磁や陶器等が出土，縄文時代後期～晩期の包含層はⅥ層で，土器の小片が出土している。遺構は検出されなかった。

2012-5 トレンチ

攪乱層を除去したところ，大部分はアカホヤ火山灰より下位の層まで削平されており，一部でアカホヤ火山灰の下部が認められる状況であった。そのため，縄文時代後期～晩期の遺物包含層は削平され，残存していないことが明らかとなった。

2012-6 トレンチ

攪乱層を除去したところ，すぐに地山が検出された。

遺物（第６，７図）

１～５は 2012-1 トレンチの攪乱層から出土した遺物である。1，2 は土器である。4，5 は近世磁器の染付で，4 は内湾し外面のみ施釉されており，徳利もしくは水柱と思われる。3 は黒曜石残核で，質が悪く，すが入っているため変則的に割れており，石器を制作できなかったため，廃棄されたものと考えられる。

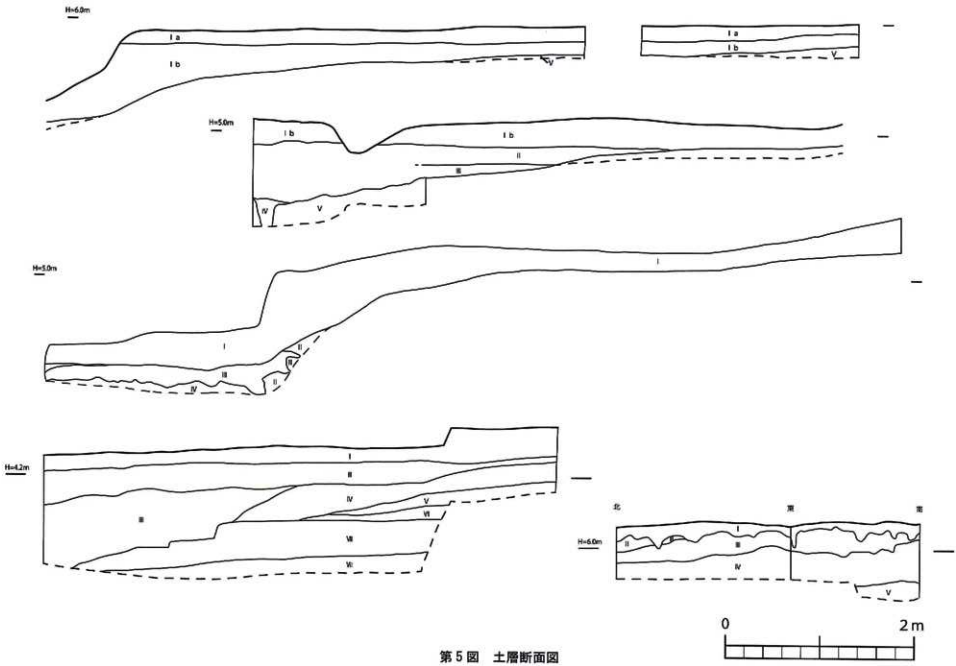
６～９は 2012-3 トレンチの攪乱層からの出土した土器である。6 は市来式土器の肥厚した波頂部片である。刺突文，沈線などが施されている。内面にも施文が施されている。7 は一湊式土器の口縁部で，口縁部，口唇部に貝殻刺突文，その下位に列点文がみられる。

10 ～ 13 は 2012-4 トレンチの出土遺物である。Ⅲ～Ⅴ層，攪乱からの出土である。10 は青磁碗底部片で，内面見込み部に 1 条同心円状の文様を施している。11 は外反する器形の青磁碗口縁部である。12 ～ 13 は磁器で，13 は漳洲窯系の可能性がある（註 1）。

14 ～ 15 は表採遺物の青磁である。14 は内面見込みに 15 は外面にヘラ状器具による施文が施されている。16 は陶器である。

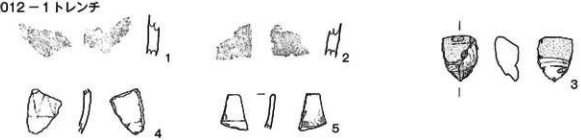
17 ～ 22 は国史跡広田遺跡の横を走る広田川対岸の周知の埋蔵文化財包蔵地である，「北側丘陵地区」で表採した土器である。17，18 は直行または波状の断面がくの字状を呈する市来式の口縁部で，爪形刺突文の間に太い沈線や貝殻刺突文等を施している。19 は一湊式土器の口縁部で，外面は細い沈線下位に列点文，口唇部に貝殻刺突文，内面に列点文が施され，胎土に雲母を多く含む。20 は口縁部断面が二等辺三角形を呈し，屈曲下位に貝殻刺突文を施しており，丸尾式土器と思われる。

23 ～ 26 は調査期間中に作業員の方が国史広田遺跡の前の海岸で表採したもので，いずれも

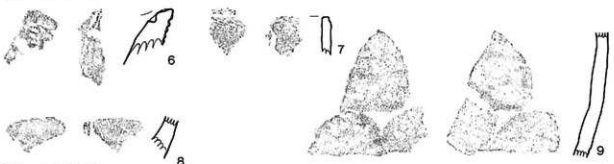

H=6.0m
I a
I b
V
H=5.0m
I b
II
III
IV
V
H=5.0m
I
II
III
IV
H=4.2m
I
II
III
IV
V
VI
VII
北
東
H=6.0m
0
2m

第５図　土層断面図

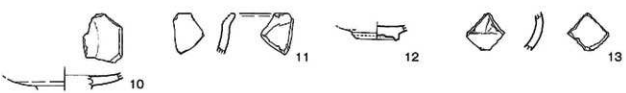
2012－1トレンチ



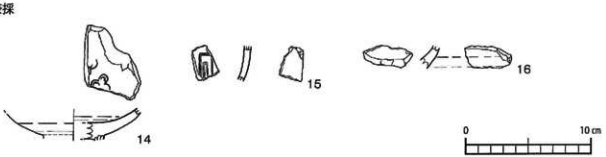
2012－3トレンチ



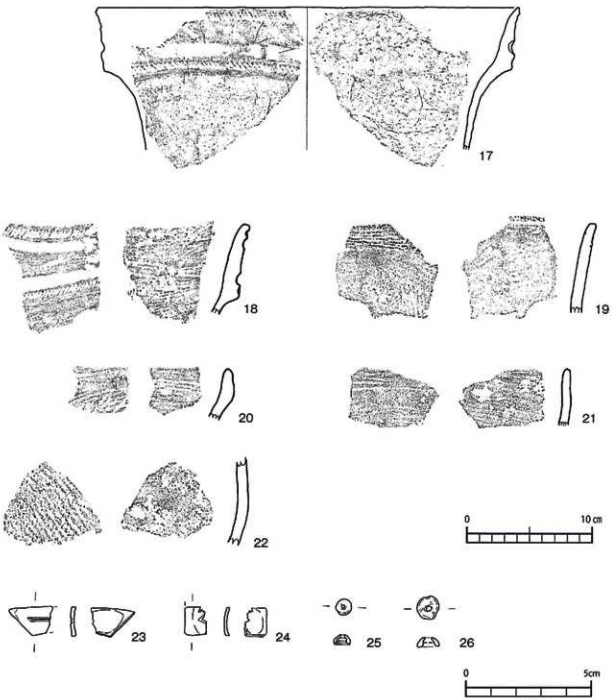
2012－4トレンチ



表採



第6図　広田Ⅲ遺跡出土遺物



第７図　表採　土器・貝製品

第1表　広田遺Ⅲ跡遺物観察表

土器　観察表

縄文遺物番号	遺物番号	出土区	層	器種	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 チャモ	胎土 その他	焼成	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	文様	備考
	1	2012-1T	黒色	深鉢	○	○	○	○	○		良好	黒褐	暗褐	ナデ	ナデ		
	2	2012-1T	黒色	深鉢	○	○	○	○	○		良好	褐	明褐	ナデ・ミガキ	ナデ		
	6	2012-3T	撹乱	深鉢	○	○	○	○			良好	暗赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	刻目、太沈線	羽状口縁
	7	2012-3T	撹乱	深鉢	○	○	○	○	○		良好	暗赤褐	赤褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	巡点文、貝殻刺突文、	
	8	2012-3T	撹乱	深鉢	○	○		○	○		良好	にぶい赤褐	褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		
	9	2012-3T	撹乱	深鉢	○	○		○	○		良好	明赤褐	褐	ナデ	ナデ・ミガキ		
	17	北岸五段地区	表採	深鉢	○	○	○	○			良好	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	爪形刺突文、太沈線	
	18	北岸五段地区	表採	深鉢	○	○		○			良好	明赤褐	褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	爪形刺突文、太沈線、貝殻刺突文	羽状口縁
	19	北岸五段地区	表採	深鉢	○	○		○	○		良好	褐	にぶい赤褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	巡点文、貝殻刺突文、沈線	
	20	北岸五段地区	表採	深鉢	○	○	○	○			良好	明褐	明赤褐	ナデ	ナデ		
	21	北岸五段地区	表採	深鉢	○	○	○	○			良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	縄文	
	22	北岸五段地区	表採	深鉢	○	○	○	○			良好	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	貝殻刺突文	羽状口縁

石器　観察表

縄文遺物番号	遺物番号	出土区	層	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	石材	備考
	3	2012-1T	撹乱	石鏃残欠	3.6	2.2	1.8	20.2	黒曜石	

青磁・陶磁器　観察表

縄文遺物番号	遺物番号	出土区	層	神籠	器種	色調 外面	色調 内面	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 底径	法量 (cm) 器高	焼成	備考
	4	2012-1 t	撹乱	稲器	造利、水柱か	灰白	灰白				良好	
	5	2012-1 t	撹乱	稲器	瓶	灰白	灰白				良好	内外面釉付あり
	10	2012-4T	V	青磁	碗	灰オリーブ	灰オリーブ	-	-		良好	内面見込みに１条同心円文様あり
	11	2012-4T	撹乱	青磁	碗	灰オリーブ	灰オリーブ				良好	
	12	2012-4T	Ⅲ	稲器	碗	灰白	灰白	-	3.6		良好	
	13	2012-4T	Ⅳ	稲器	小碗	灰白	灰白				良好	
	14	2012-4T	Ⅳ	青磁	碗	淡黄	淡黄				良好	
	15		表採	青磁	碗	灰白	灰白	-	-	(1.8)	良好	
	16		表採	陶器	瓶	明灰オリーブ	明灰オリーブ				良好	

貝符　観察表

縄文遺物番号	遺物番号	出土区	層	種類	大きさ (mm) A(L/S)	大きさ (mm) B(L/S)	厚さ (mm) (L/S)	重さ (g)	備考
	23	広田海岸	表採	上層貝符	1.1/1.0	1.7/(0.6)	0.1	0.5	
	24	広田海岸	表採	上層貝符	(1.1)	0.9/0.6	0.1	0.3	一部切り込みあり

イモガイ珠　観察表

縄文遺物番号	遺物番号	出土区	層	種類	径 (L/S) (mm)	最大厚 (mm)	重さ (g)	備考
	25	広田海岸	表採	イモガイ珠　Ⅰ類	6.5/6.0	0.15	0.1	
	26	広田海岸	表採	イモガイ珠　Ⅰ類	0.9	0.2	0.3	全体的に風化による摩耗がみられる

広田遺跡の遺物であると思われる。23，24は上層貝符である。23は台形状を呈し，外形に沿った線刻が施されている。24は欠損しており形状は不明であるが，一部切り込みによる鋸歯状を呈すると思われる。25，26はイモガイ珠で，広田遺跡での分類における，上下側面磨き調整を施していない自然の形を呈するⅠ類である。

第4節　まとめ

調査の結果，2012-4トレンチの畑部分でのみ，遺物包含層が確認された。その他のトレンチでは，2012-3トレンチのように，従来は遺物包含層があったと想定される地点もあったが，畑や水田による造成の影響で残存していないことが明らかとなった。現在は平坦な台地上を呈するが，元々はより起伏のある地形であったと考えられる。

今回の調査成果を受け，従来の広田Ⅲ遺跡の想定範囲より範囲が縮小することが明らかとなり，広田遺跡の整備に係る部分には遺跡が存在しないことが明らかとなった。

また，調査期間中に周辺の遺跡調査を行い，広田川対岸の「北岸丘陵地区」の縄文時代後期の遺物を確認し，資料の充実を図ることができた。

(註1) 鶴田静彦氏にご教示いただいた。

(参考文献)
国分直一ほか2003『種子島　広田遺跡』広田遺跡学術調査研究会，鹿児島県歴史資料センター黎明館
徳田有希乃2007「第Ⅲ章広田遺跡周辺の調査」『広田遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(15)南種子町教育委員会

第Ⅳ章　横峯Ｂ・Ｆ遺跡

第１節　調査の概要

横峯Ｂ遺跡，横峯Ｆ遺跡は，南種子町大字宮成基盤整備事業（通作）横峯地区に伴う分布調査で工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地にかかることが明らかとなり，平成 24 年度，町内遺跡発掘調査等事業で試掘・確認調査を行った。

横峯Ｂ・Ｆ遺跡では，12 箇所トレンチを設定した。調査の起因となった農道の支線から，8 号支線に設定したトレンチは 2012-8-1 ～７トレンチ，9 号支線に設定したトレンチは 2012-9-1 ～２トレンチ，10 号支線に設定したトレンチは 2012-10-1 ～３トレンチとした。

調査に際しては，事前に草払い機等による周辺の伐採を行ったが，その際にスズメバチが発生し，駆除を行った後，重機により表土を剥ぎ取りを行い，それ以下は人力で掘り下げて調査を行った。

調査期間は平成 24 年８月 25 日～８月 31 日の実働５日間で，調査面積は 52 ㎡である。

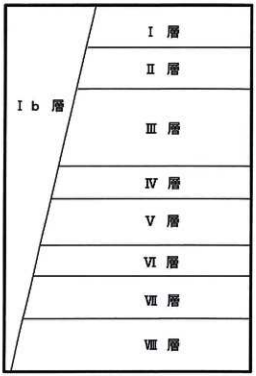
第2節　層位

標準土層を，2012-8-4 トレンチをもとに示す。今回，種Ⅲ火山灰以下よりアカホヤ火山灰層まで貫く噴礫層が確認された。

■噴礫現象について

この噴礫現象は，こぶし小～大の砂岩礫が層を貫いて見られる現象である。「6.5kaBP に鬼界カルデラで発生したアカホヤ噴火に伴った地震の痕跡」（成尾ほか 2002）で，地震により砂礫層が液状化し，吹き出した痕跡と考えられている。

種子島では海岸段丘の発達する西海岸で多く確認されており，西海岸の段丘上に位置する有鹿野遺跡でも確認されている。



第8図　基本土層図

Ⅰ　層　アカホヤ火山灰層

Ⅰｂ層　噴礫層：種Ⅲ火山灰以下よりアカホヤ火山灰層まで貫く噴礫層

Ⅱ　層　茶褐色土層：縄文時代早期相当層

Ⅲ　層　暗褐色粘質土層

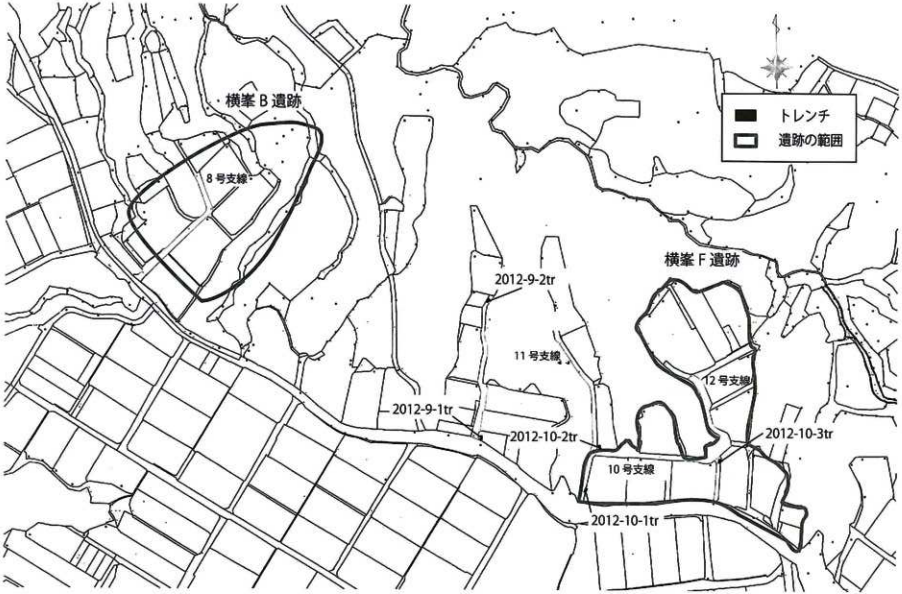
Ⅳ　層　AT 火山灰層

Ⅴ　層　暗褐色強粘質土層

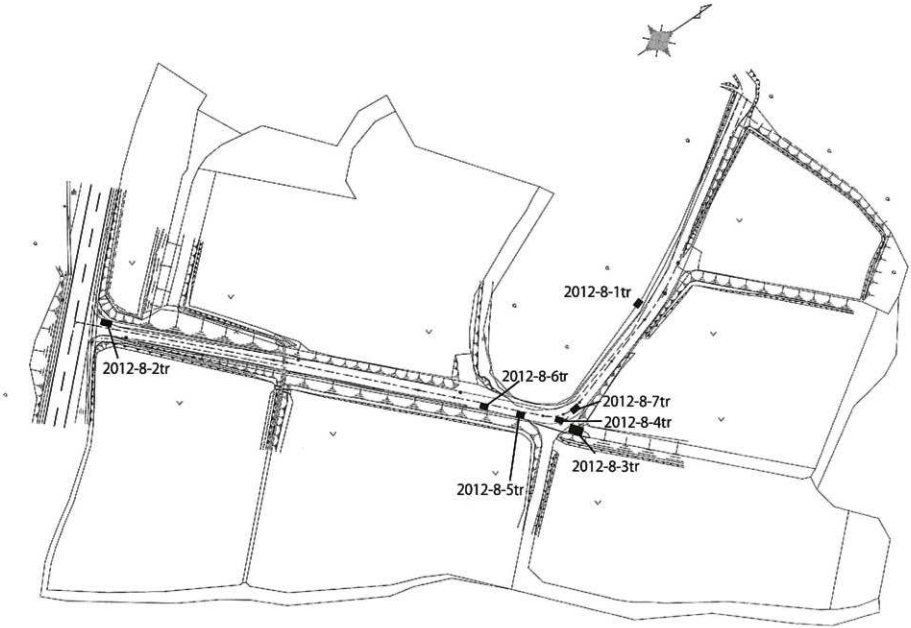
Ⅵ　層　種Ⅳ火山灰層

Ⅶ　層　淡褐色粘質土層

Ⅷ　層　種Ⅲ火山灰層



第 9 図　トレンチ配置図①　S= 1 / 5 0 0



第 10 図　8号支線　トレンチ配置図　S= 1/ 100

第３節　遺構・遺物

各トレンチの調査成果は，以下のとおりである。

2012-8-1 トレンチ

攪乱層を重機で除去し，人力で掘り下げた。アカホヤ火山灰層の下位まで削平を受けており，かろうじてVI層以下が残存していたが，遺構・遺物は確認されなかった。

2012-8-2 トレンチ

攪乱層を重機で除去したが，地山まで攪乱が続いており遺構・遺物は確認されなかった。

2012-8-3 トレンチ

攪乱層を重機で除去・周辺の伐採を行った際，大量のスズメバチが発生したため，害虫駆除スプレーで駆除を行ってから，人力での掘り下げを行った。アカホヤ火山灰層より上位は削平を受けていたが，その下位は残存していた。噴礫層から縄文時代早期と思われる土器片が１点出土したが，早期相当層のⅡ層からは遺構・遺物ともに確認されなかった。

2012-8-4 トレンチ

攪乱層を重機で除去した後，Ⅱ層相当層が認められたので人力で掘り下げを行った。しかし，遺構・遺物は確認されなかった。

2012-8-5 トレンチ

攪乱層を重機で除去した後，Ⅱ層相当層が認められたので人力で掘り下げを行った。しかし，遺構・遺物は確認されなかった。

2012-8-6 トレンチ

攪乱層を重機で除去したところ，Ⅳ層以下が残存していることが明らかとなった。遺構・遺物は確認されなかった。

2012-8-7 トレンチ

攪乱層を重機で除去した後，Ⅱ層相当層が認められたので人力で掘り下げを行った。しかし，遺構・遺物は確認されなかった。

2012-9-1 トレンチ

攪乱層を重機で除去したが，地山まで攪乱が続いており遺構・遺物は確認されなかった。

2012-9-2 トレンチ

攪乱層を重機で除去したが，地山まで攪乱が続いており遺構・遺物は確認されなかった。

2012-10-1 トレンチ

攪乱層を重機で除去したが，地山まで攪乱が続いており遺構・遺物は確認されなかった。

2012-10-2 トレンチ

攪乱層を重機で除去したところ，アカホヤ火山灰層下位の層が残存しており，人力で掘り下げを行った。しかし，遺構・遺物は確認されなかった。

2012-10-3 トレンチ

攪乱層を重機で除去したが，地山まで攪乱が続いており遺構・遺物は確認されなかった。

第4節　まとめ

調査の結果，遺構の検出はなく出土した遺物も土器１点，噴礫層からの出土であった。土器の出土した 2012-8-4 トレンチ周辺に確認のため追加でトレンチを設定し詳細な調査を行った。遺構・遺物の確認はされなかったものの，縄文時代早期相当のⅡ層が残存することが明らかとなったため，農政部と協議し，同地点ではⅡ層より約 15cm 上面までの掘削に留める設計に変更し，工事への引渡しを行った。

(引用文献)

成尾英二・小林哲夫 2002「鬼界カルデラ，6.5kaBP 噴火に誘発された２度の巨大地震」『第四紀研究 41』

第Ⅴ章　一陣長崎鼻遺跡

第１節　調査の概要

一陣長崎鼻遺跡は，南種子町大字中之下字一陣に位置する。昭和30年に発見され，昭和31年に盛園尚孝（中種子町野間中学校教諭　当時）により発掘調査が行われ，黒川式土器のみが出土する縄文時代晩期の貝塚遺跡として周知されていた。当時の調査では，黒川式土器のほか，貝製品や人骨が確認されたほか，多量の獣骨・貝殻・魚骨などの自然遺物も出土している。人骨は種子島では最古の出土例であり，本町の歴史を知る上で重要な遺跡であるとして，町の選定文化財に選定されている。

その後，南種子町教育委員会は，広田遺跡の保護のため範囲確認調査を平成17～18年度に実施している。同様に海岸砂丘に位置する一陣長崎鼻遺跡も保護を目的に，平成19～21年，遺跡が想定される一帯の確認調査を実施した。

調査の結果，不明であった遺跡の位置を特定し，良好な遺物包含層が残存することを確認している。また，今回の調査出土品の整理・報告に合わせ，昭和31年調査時の出土品を再整理した。その結果，壺形土器を伴うことや深鉢形土器に細沈線文が施される一群があること，また，土器付着炭化物の ^{14}C 年代の測定結果から，従来考えられていた黒川式土器としては時代が新しく，再評価する必要性があることが明らかとなった。こうした成果は，平成22年度に正式な報告書を刊行している。（石堂・松原2011）

今回の調査地点は，遺跡から西側に約50ｍの開語川沿いの低地である。平成23年６月，河川の氾濫で崩落した壁面から土器や貝類が露出しているのを発見したとこから，その詳細を確認することを目的に確認調査を実施することとなった。

平成23年度は，調査にあたり，平成21年度の調査で設定した基準杭をもとに調査区を設定し，重機で表土を除去した。表層の砂層が約４ｍと非常に厚く，砂で崩壊しやすいため段状に掘り下げたため，表土の除去に時間を要した。表土を除去した後，土器等が露出した地点に３ｍ×４ｍの2011-1トレンチを，隣接して３ｍ×４ｍの2011-2トレンチを設定し，人力で掘り下げ，調査を行った。記録保存後は大型土嚢により遺物包含層の保護対策を行っている。

平成24年度は，前年度の調査から，崩落していない部分に広く遺跡が残存すると考えられたため，範囲確認のため2011-2トレンチの東側に2012-1トレンチを１箇所設定し，人力で掘り下げを行った。調査期間が限られていたため，Ⅱ層以下は先行トレンチを設定し，その部分を人力で掘り下げた。

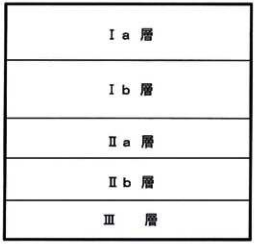
調査期間は平成24年９月５日～９月14日の実働７日間で，調査面積は800㎡である。

第２節　層位

標準土層を，2011-2 トレンチ及び 2012-1 トレンチの西壁の土層断面図をもとに示す。

2011-2 トレンチ西壁

Ⅱ層とⅢ層の間には砂が固化する現象，デューンロックがみられ，調査の際には金槌を用いて掘り下げを行った。また 2011-2 トレンチⅢ層は無遺物層としているが，ごく一部を掘り下げたのみで，2012-1 トレンチⅣ層に類似しているため，遺物包含層である可能性がある。



第 11 図　基本土層図 (1)

Ⅰａ層　暗黄褐色砂層：無遺物層
　　ラミナ層を含まない

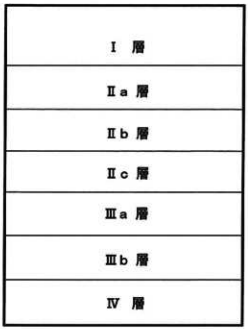
Ⅰｂ層　暗黄褐色砂鉄混じり砂層：無遺物層
　　砂鉄を含むラミナ層が特徴的にみられる

Ⅱａ層　暗褐色砂層　：遺物包含層（縄文時代前期）　轟Ｂ式土器を含む。砂鉄を多く含み，ハマグリを主体とする自然遺物を多く含む

Ⅱｂ層　暗褐色礫混じり砂層：遺物包含層（縄文時代前期）　1～3cm の円礫が多量にまじる

Ⅲ　層　暗茶褐色砂層：無遺物層

2012-1 トレンチ西壁



第 12 図　基本土層図 (2)

Ⅰ　層　灰暗黄褐色砂層
　　：無遺物層　風成砂層

Ⅱａ層　にぶい黄橙色砂層
　　：遺物包含層（縄文時代前期）
　　曽畑式土器を含む

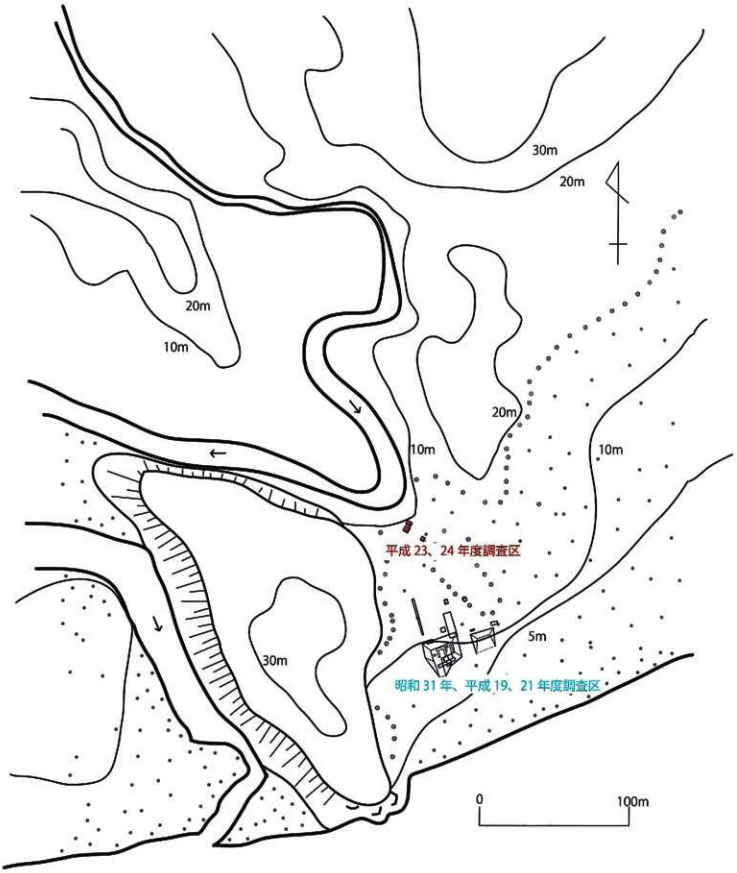
Ⅱｂ層　にぶい黄褐色砂層
　　：遺物包含層（縄文時代前期）

Ⅱｃ層　灰白色砂層
　　：遺物包含層（縄文時代前期）

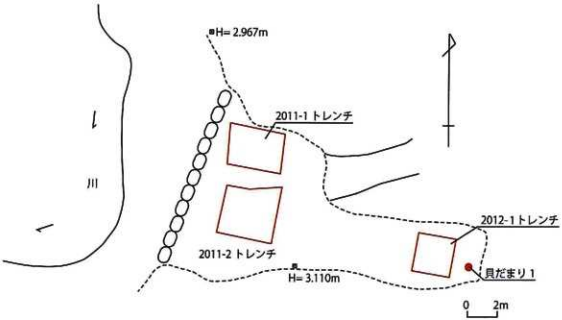
Ⅲａ層　灰黄褐色粗砂層
　　：遺物包含層（縄文時代前期）
　　西川津系を含む轟Ｂ式土器を主体とする。自然遺物を一定量含む

Ⅲｂ層　黒褐色粗砂層
　　：遺物包含層（縄文時代前期）

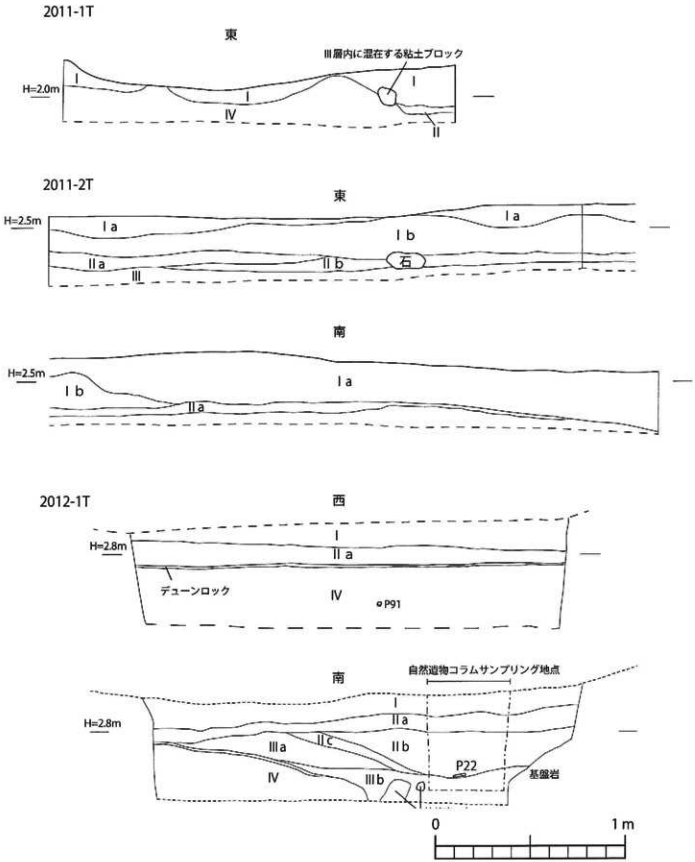
Ⅳ　層　暗褐色シルト層
　　：遺物包含層（縄文時代前期）
　　轟Ｂ式土器を主体とする。自然遺物をほとんど含まない



第 13 図　一陣長崎鼻遺跡調査地点位置図



第 14 図　トレンチ配置図


2011-1T
東
Ⅲ層内に混在する粘土ブロック
H=2.0m
Ⅰ
Ⅰ
Ⅰ
Ⅳ
Ⅱ
2011-2T
東
H=2.5m
Ⅰa
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱa
Ⅱb
石
Ⅲ
南
H=2.5m
Ⅰb
Ⅰa
Ⅱa
2012-1T
西
H=2.8m
Ⅰ
Ⅱa
デューンロック
Ⅳ
P91
南
自然遺物コラムサンプリング地点
H=2.8m
Ⅰ
Ⅱa
Ⅲa
Ⅱc
Ⅱb
P22
基盤岩
Ⅳ
Ⅲb
0
1m

第 15 図　土層断面図

第３節　遺構・遺物

各トレンチの調査成果は，以下のとおりである。

2011-1 トレンチ

十器を採集した崩落壁面地点に，重機で表土を除去したあと３ｍ×４ｍのトレンチを設定し，人力での掘り下げを行った。土器の小片のほか貝や獣骨などの自然遺物が出土した。

2011-2 トレンチ

2011-1 トレンチに隣接して３ｍ×４ｍのトレンチを設定し，人力で掘り下げを行った。調査期間の都合上，最も川側の３ｍ×１ｍのみを記録保存した。遺構は検出されず，土器や貝・獣骨といった自然遺物が出土した。

2012-1 トレンチ

前年度の調査から，木崩落部分に遺跡が残存する可能性があることが明らかとなり，東側の内陸部にトレンチを設定した。表土である新鮮砂層が厚く堆積しており，標高約8.5ｍの地表面から遺物包含層が堆積する標高約３ｍまで重機で表土を除去し，その後トレンチを設定して人力で掘り下げを行った。Ⅱ層またはⅡａ層で貝類等の自然遺物が集中する，貝溜まりを３箇所検出した。また，トレンチ外ではあるが，表土除去に伴いトレンチ周辺の精査をしている段階で１箇所，貝溜まりを検出した。いずれもハマグリを主体とし，貝類，脊椎動物遺体が集中して出土した。

また，調査に伴う排土はすべて２ｍｍメッシュのフルイにかけ，微小な自然遺物等を収集した。サンプリングを行った土壌は，土のう袋にいれて持ち帰り，整理作業の際にまず２ｍｍメッシュのフルイにかけ，さらにウォーターフローテーションを行い，微小の自然遺物等の収集に努めた。

土器

土器は遺物包含層であるⅡ～Ⅳ層で出土している。土器の器形は「単純な深鉢形」と「腹部が張る，もしくは『く』の字状を呈する屈曲形の深鉢形」に大別できる。胎土に雲母を含むものもある。器形，文様等からⅠ類～Ⅶ類まで分類する。無文で判別が難しいものは胴部として報告する。

Ⅰ類土器（１～５）

十器内外面に器面調整に伴う貝殻の腹縁を用いた条痕文を施し，直行する口縁部の下部もしくは胴部に細い粘土紐を巡らせ，指やヘラでつまんで貼り付ける，ミミズバレ状の突帯（以下，ミミズバレ状突帯という）を１～数条施す土器である。

１は大型の深鉢で，口縁部から胴部上面にかけて７条横位にミミズバレ状突帯が巡っている。器壁は薄く，胎土に雲母を含む。２も同様に大型の深鉢胴部で，横位に３条ミミズバレ状突帯が施す。１は1.5～2cm間隔，２は約３cm間隔で突帯を施している。３は３条ミミズバレ状突帯を有する土器で，放射性年代測定を行った土器である。４は１条ミミズバレ状突帯が施される。突帯は指オサエや横ナデにより突帯を波状にみせかけていると思われる。５はやや細めのミミズバレ状突帯が２条施されている。小片なので判別は難しいが，一部カスレ・トギレ状を呈していると思われる。

Ⅱ類土器（６～10）

Ⅰ類同様，土器内外面に器面調整に伴う貝殻の腹縁を用いた条痕文を施し，口縁下部もしくは胴部にミミズバレ状突帯を施すが，Ⅰ類に比べミミズバレ状突帯が厚ぼったく，指やヘラで両端を強くつまんで貼り付けており，突帯の断面が三角形を呈する土器である。

６のミミズバレ状突帯は貼り付けの際の上下からの摘みが強く，断面が三角形の尖り突帯状を呈する。７は３条，８は１条ミミズバレ状突帯を横に巡らせている。内面には粘土紐積み上げによる跡が認められる。９はミミズバレ状突帯１条が施され，内外面器面調整は条痕文で外面はナデにより条痕が磨り消されている。10は１条ミミズバレ状突帯が施される。内面に製作の際の粘土紐積み上げの跡が残る。

Ⅲ類土器（11～18）

土器内外面に器面調整に伴う貝殻の腹縁を用い

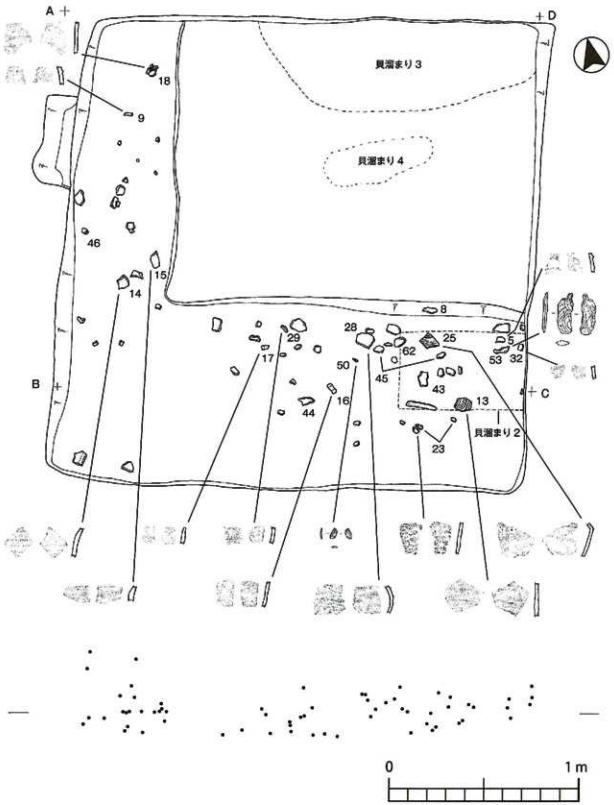
た条痕文を施し，横位に棒状工具で刻目を１～数条施す土器である。器形は口縁部が内湾するものもあるが，胴部が緩やかな「く」の字状を呈するものもある。

11は口縁部が内湾する器形で，口唇部はナデにより直角を呈する。３列の横位の刻目刺突文は，先端の尖った角状の工具で刺突しており，刻目が菱形になっている。刺突による盛り上がりがみられ，断面は緩やかな波状を呈する。器面調整に内外面強い条痕文がみられる。12はやや外反しており，４列横位の刻目刺突文が施される。最上の刻目刺突文直上に条沈線が施されている。それぞれ，刺突による盛り上がりがみられ，断面は緩やかな波状を呈する。器壁は薄く，胎土は雲母を含み，１㎜～２㎜程度の礫も混入する。13は胴部に３列刻み目刺突文が施される。刻目が半円を描くようにやや斜めから刺突しており，刺突による盛り上がりはほとんど認められない。14はやや外反し，４列刻目刺突文が施され，器面には刺突による盛り上がりが認められる。15は外反し，２列刻目刺突文がみられる。器面には刺突による盛り上がりが認められ16は２列刻目刺突文を施す。刻目下部にやや厚みを持ち，器面が緩やかな波状を呈する。17は口縁部で，断面はほぼ直角を呈する。１列刻目刺突文が施される。18はやや外反し，１条刻目刺突文が施されているが，一部途切れている。

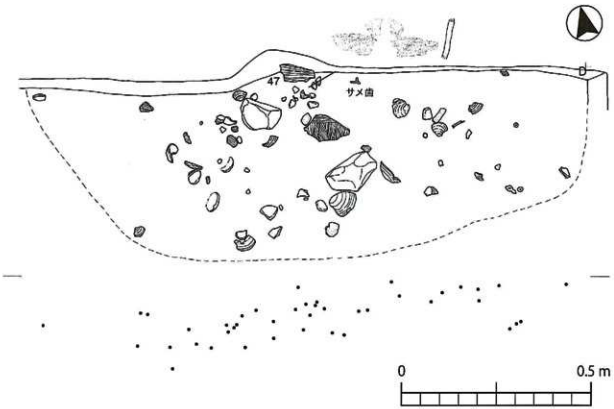
Ⅳ類土器（19～32）

土器内外面に器面調整に伴う貝殻の腹縁を用いた条痕文を施し，粘土紐を貼り付けた後，棒状工具で刻み目を入れた，刻目突帯と沈線を組み合わせた土器である。器形は腹部が張るもの，「く」の字状に屈曲するものがある。刻目突帯上部に沈線を横位や斜位に施しており，細い粘土紐を貼付けた微隆突帯を弧状や同心円状に施すものや玉状突起を施すもの，鋸歯状の刻目突帯内側に沈線を施すものなど，文様はバリエーションに富む。

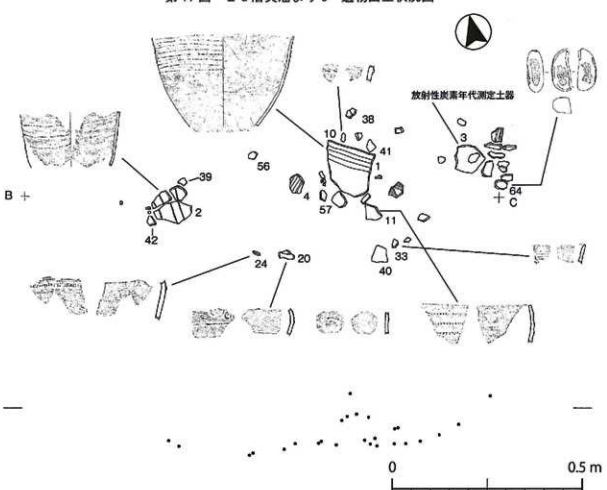
19はミミズバレ突帯状を横位に１条，縦位に２条組み合わせている。20は丸みを呈した深鉢の胴部。張り出し部に１条細い尖り突帯を施す。突帯上部の文様は，沈線，渦巻き状と思われる細い微隆突帯，粘土塊を指オサエで貼り付けた円状突起がみられる。19，20は刻目ではないが，突帯を組み合わせて文様を施しており，Ⅲ類の範疇と考える。21は細い微隆突帯を同心円状に３条巡らせ，その中心部に縦位の細い微隆突帯を施している。下部には刻目刺突文がみられる。22は横に巡る刻目突帯上面に細めの微隆突帯を弧状に貼付け，突帯間には沈線を施している。刻目突帯部でやや屈曲する。胎土は緻密で硬い。23は弧状の刻目突帯の下部にもう１条刻目突帯を，上部には沈線を施している。器面調整は，外面は条痕文。器壁は薄く，胎土に雲母を含む。24は緩やかに屈曲する胴部で，張り出し部分に１条刻目突帯を施し，その上部に沈線がみられる。胎土に雲母を含む。25は肩部が強く屈曲しており，その張り出し部に１条横位の刻目突帯が施されている。この突帯の刻目はやや斜めから突帯を切るように施されており，さらに上部はＶ字を描くような刻目を入れ，凸部分を誇張している。突帯上面の平坦部には沈線が施されている。26は直角に近い屈曲を呈する器形の肩部。全体的に風化により文様が摩滅しているが，屈曲する張り出し部に刻目突帯もしくは刻目刺突文を施し，肩平坦面には縦位の刻目突帯と横位の明瞭な沈線が施されている。27は，「く」の字状に屈曲する胴部で，張り出し部分に風化で摩滅しているが刻目刺突文を１列施している。屈曲上部には斜位の刻目突帯が施され，刻目刺突文との間には沈線が施されている。内面調整には強い条痕がみられる。28は湾曲した深鉢の胴部。刻目突帯を横位，斜位に巡らせており，突帯が鋸歯状もしくは交差すると思われる。突帯で囲まれた部分には斜位の沈線を施している。器面調整は内外面条痕文で胎土に雲母を含む。29は丸みを帯びた胴部で，湾曲部に１条刻目突帯がみられる。器面調整は内面に一部条痕文が残るものの，大部分は磨り消されている。30は刻目突帯上部に太く明瞭な沈線が



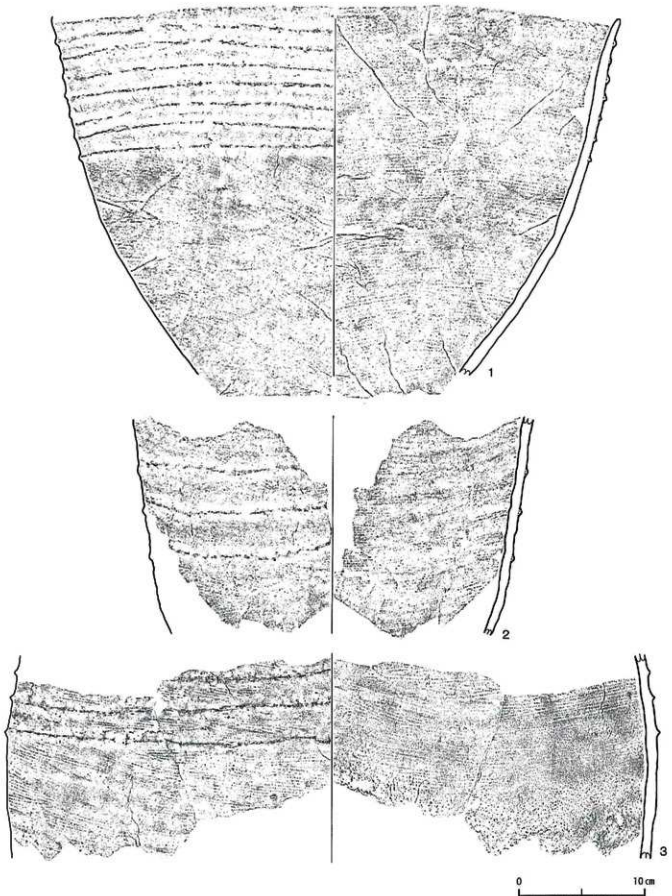
第16図　Ⅱ～Ⅳ層遺物出土状況図



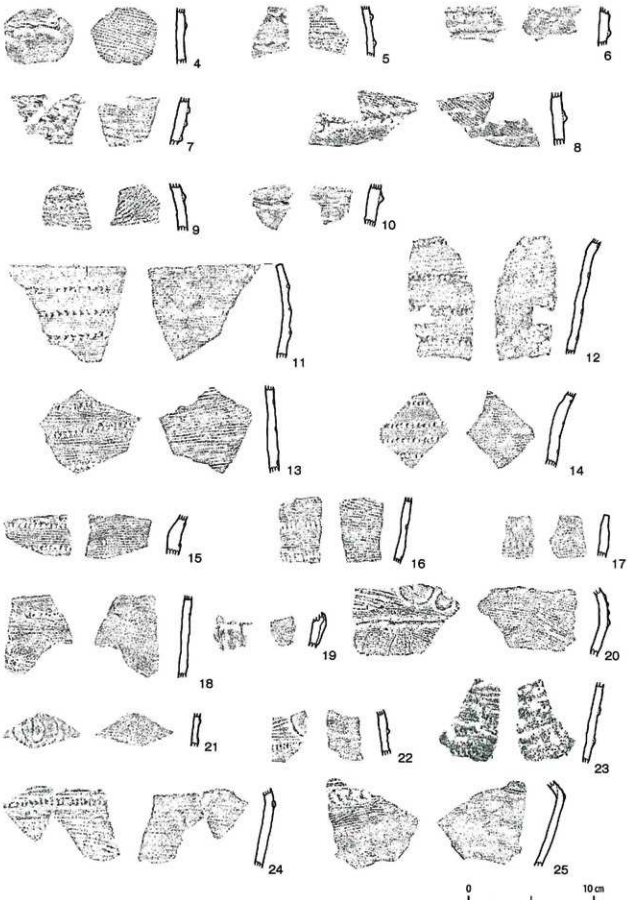
第 17 図　Ⅱ a 層貝溜まり 3　遺物出土状況図



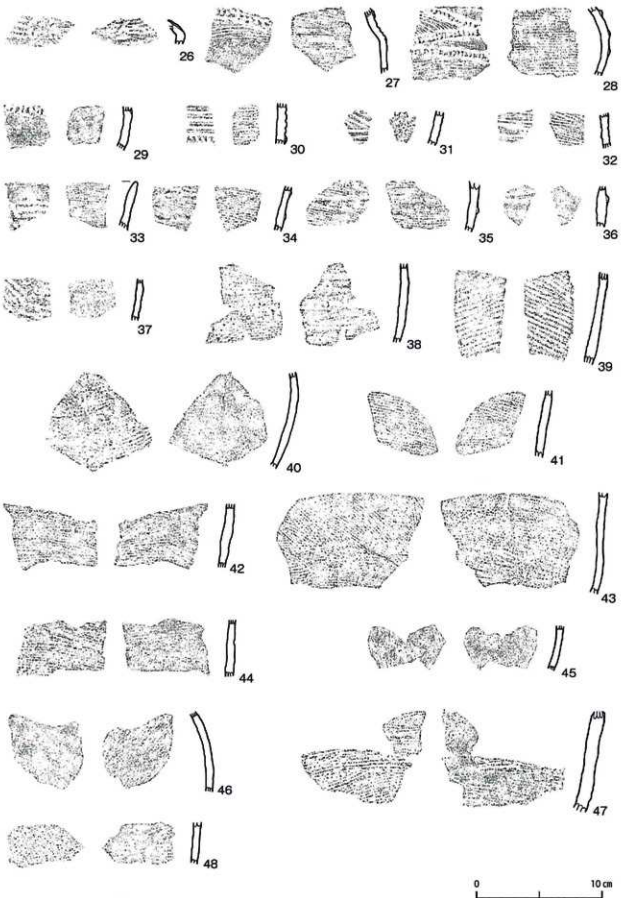
第 18 図　Ⅳ層下部遺物出土状況図



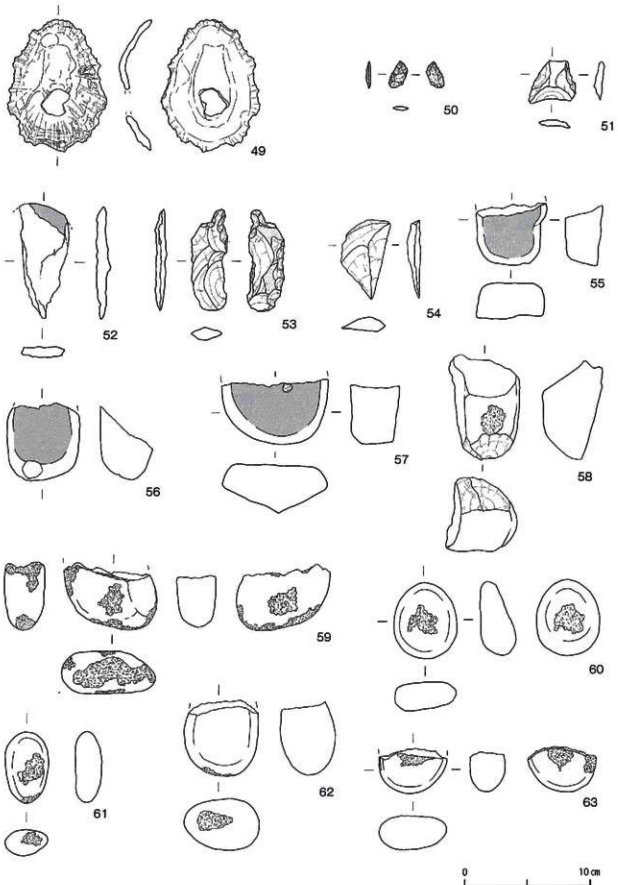
第19図　土器（1）



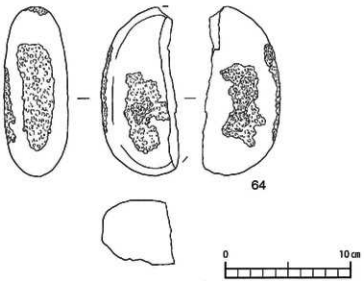
第20図　土器（2）


26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
0
10cm

第21図　土器（3）



第22図　貝製品・石器（1）



第23図　石器（2）

施されている。31は太い沈線を数条，鋸歯状に施している。胎土に雲母を含み，器壁は薄い。32はやや太めの沈線が施されている。

V類土器（33）

土器内外面に器面調整に伴う貝殻の腹縁を用いた条痕文を施し，外面に短い押引文を施す土器である。

33はやや外反する口縁部。口縁部下位に詰まった横位の太い押引文を施している。

VI類土器（34～36）

細い粘土紐を貼付けた微隆突帯を横位に巡らせる土器である。指やヘラで両端を強くつまんで貼り付けており，突帯の断面が三角形を呈する。

34は2条の細いミミズバレ状突帯を横位に巡らせ，トギレ・カスレもみられる。35は横位の細いミミズバレ状突帯が1条施される。一部切れており，トギレ状を呈する。36は1条，横位に微隆突帯を施している。

VII類土器（37）

棒状工具により幅広の沈線を施す土器である。

34はわずかに内湾し，斜位，横位のやや太めの沈線が施されている。

胴部（38～48）

土器内外面に器面調整に伴う貝殻の腹縁を用いた条痕文を施す，土器の胴部である。

38～48は胴部である。内外面器面調整に強い条痕文がみられるものが多い。

貝製品（49）

49はオオツタノハの貝輪未製品である。縄文時代晩期の調査区A地点付近で表採されたもので，磨きなどの調整は施されておらず，殿頂下部に敲打による穿孔がみられる。

石器（50～64）

石器はII層から51の磨製石鏃，52の磨製石斧が出土したのみで他はすべてIV層及びIV層下部からの出土であった。50は頁岩の打製石鏃，51は風化により調整痕は摩滅しているが，粘板岩製の磨製石鏃もしくは未製品と思われる。52は磨製石斧である。刃の磨製部分を一部残すのみでほとんど欠損している。53は頁岩製の石匙である。縦型石匙で左右端部に調整を施し刃部を形成している。57は熱により硬質化した変成砂岩の磨石である。58～64は砂岩製の敲石である。58は端部に欠損がみられるが，刃部を形成するに至らず，敲打の際に生じた欠損と考えられる。

第２表　一陣長崎鼻遺跡遺物観察表

土器　観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	分類	器種	胎土						焼成	色調		調整		文様	備考
						石英	長石	角閃石	礫	ウンモ	その他		外面	内面	外面	内面		
19	1	2012-1T	Ⅳ下部	Ⅰ	深鉢							良好						
19	2	2012-1T	Ⅳ下部	Ⅰ	深鉢	○	○	○	○			良好	暗褐	褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	ミミズバレ状突帯	
19	3	2012-1T	Ⅳ下部	Ⅰ	深鉢	○	○	○	○			良好	にぶい褐	にぶい赤褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	ミミズバレ状突帯	年代測定資料
20	4	2012-1T	Ⅳ下部	Ⅰ	深鉢	○	○	○	○			良好	にぶい褐	橙	ナデ，条痕文，指オサエ	条痕文	ミミズバレ状突帯	
20	5	2012-1T	Ⅳ	Ⅰ	深鉢	○	○	○	○			良好	にぶい褐	にぶい褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	ミミズバレ状突帯	
20	6	2012-1T	Ⅱ	Ⅱ	深鉢	○	○	○	○		○	良好	褐	明褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文，指オサエ	ミミズバレ状突帯	
20	7	2012-1T	Ⅳ下部	Ⅱ	深鉢	○	○		○			良好	にぶい褐	明褐	ナデ，条痕文	条痕文	ミミズバレ状突帯	
20	8	2012-1T	Ⅳ	Ⅱ	深鉢	○	○	○	○			良好	明黄褐	灰黄褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	ミミズバレ状突帯	
20	9	2012-1T	Ⅲ	Ⅱ	深鉢	○	○	○	○			良好	褐	黒	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	ミミズバレ状突帯	
20	10	2012-1T	Ⅳ下部	Ⅱ	深鉢	○	○	○	○			良好	明黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ，条痕文	ミミズバレ状突帯	
20	11	2012-1T	Ⅳ下部	Ⅲ	深鉢	○	○	○	○			良好	黒褐	明褐	ナデ，条痕文	条痕文	刻目	
20	12	2012-1T	Ⅳ下部	Ⅲ	深鉢	○	○	○	○	○		良好	黒褐	褐	ナデ，条痕文	ナデ	刻目	
20	13	2012-1T	Ⅳ	Ⅲ	深鉢	○		○	○			良好	褐	明褐	ナデ，条痕文	条痕文	刻目	
20	14	2012-1T	Ⅳ	Ⅲ	深鉢	○	○	○	○			良好	褐	橙	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	刻目	
20	15	2012-1T	Ⅳ	Ⅲ	深鉢	○		○	○			良好	褐	にぶい褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	刻目	
20	16	2012-1T	Ⅳ	Ⅲ	深鉢	○	○	○	○			良好	褐	にぶい褐	ナデ，条痕文	条痕文	刻目	
20	17	2012-1T	Ⅳ	Ⅲ	深鉢	○	○	○	○			良好	明褐	明褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	刻目	
20	18	2012-1T	Ⅲ	Ⅲ	深鉢	○	○	○	○			良好	にぶい褐	明褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	刻目	
20	19	2012-1T 貝溜まり２	Ⅱ	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○			良好	明褐	褐	ナデ	ナデ	ミミズバレ状突帯	
20	20	2012-1T	Ⅳ下部	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○			良好	褐	暗褐	ナデ，条痕文	条痕文	微隆突帯，沈線，円状突起，	
20	21	2012-1T	Ⅱ	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○			良好	にぶい褐	明褐	ナデ	ナデ	微隆突帯，沈線，円状突起，刻目	
20	22	2012-1T	Ⅲ a	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○			良好	褐	明褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	刻目突帯，微隆突帯，沈線	
20	23	2012-1T	Ⅳ	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○			良好	黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	刻目突帯，沈線	
20	24	2012-1T	Ⅳ下部	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○	○		良好	褐	にぶい褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	刻目突帯，沈線	
20	25	2012-1T	Ⅳ	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○			良好	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	刻目突帯，沈線	屈曲形
21	26	2012-1T	Ⅱ	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○			良好	明褐	橙	ナデ	条痕文	刻目突帯，沈線	屈曲形
21	27	2012-1T	Ⅲ	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○			良好	にぶい黄橙	橙	ナデ	条痕文	刻目突帯，沈線	屈曲形
21	28	2012-1T	Ⅳ	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○	○		良好	にぶい黄橙	にぶい褐	ナデ，条痕文	条痕文	刻目突帯，沈線	
21	29	2012-1T	Ⅳ	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○			良好	黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	刻目突帯	
21	30	2012-1T	Ⅲ a	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○	○		良好	にぶい黄褐	黒褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	刻目突帯，沈線	
21	31	2012-1T	Ⅱ	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○			良好	明褐	褐灰	ナデ	ナデ	沈線	
21	32	2012-1T	Ⅳ	Ⅳ	深鉢	○	○	○	○			良好	褐	明褐	ナデ，条痕文	条痕文	沈線	
21	33	2012-1T	Ⅳ下部	Ⅴ	深鉢	○	○	○	○			良好	灰黄褐	にぶい黄褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文	押引文	
21	34	2012-1T 貝溜まり２	Ⅱ	Ⅵ	深鉢	○	○	○	○			良好	褐	明褐	ナデ，条痕文	条痕文	ミミズバレ状突帯	
21	35	2012-1T	Ⅱ b	Ⅵ	深鉢	○	○	○	○			良好	にぶい褐	にぶい褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文，指オサエ	ミミズバレ状突帯	
21	36	2012-1T	Ⅱ	Ⅵ	深鉢	○	○	○	○			良好	明褐	明褐	ナデ	ナデ	微隆突帯	
21	37	2012-1T	Ⅱ a	Ⅶ	深鉢	○	○	○	○			良好	灰黄褐	黒褐	ナデ	ナデ	沈線	
21	38	2012-1T	Ⅳ下部	胴部	深鉢	○		○	○			良好	にぶい褐	明褐	条痕文	条痕文		
21	39	2012-1T	Ⅳ下部	胴部	深鉢	○	○	○	○	○		良好	褐	褐	ナデ，条痕文	条痕文		
21	40	2012-1T	Ⅳ下部	胴部	深鉢	○	○	○	○			良好	にぶい橙	にぶい黄褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文，指オサエ		
21	41	2012-1T	Ⅳ下部	胴部	深鉢	○	○	○	○			良好	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文		
21	42	2012-1T	Ⅳ下部	胴部	深鉢	○	○	○	○	○		良好	にぶい黄褐	褐	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文		
21	43	2012-1T	Ⅳ	胴部	深鉢	○	○	○	○			良好	橙	にぶい黄橙	ナデ，条痕文	ナデ，条痕文		
21	44	2012-1T	Ⅳ	胴部	深鉢	○	○	○	○			良好	褐	明褐	条痕文	ナデ，条痕文		
21	45	2012-1T	Ⅳ	胴部	深鉢	○	○		○	○		良好	にぶい褐	黒褐	ナデ	ナデ，条痕文		
21	46	2012-1T	Ⅲ	胴部	深鉢	○	○	○	○			良好	褐	明黄褐	ナデ	ナデ，条痕文		
21	47	2012-1T	Ⅱ a	胴部	深鉢	○	○	○	○		○	良好	にぶい黄褐	褐	ナデ，条痕文	条痕文		
21	48	2012-1T	Ⅱ a	胴部	深鉢	○	○	○	○			良好	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ，条痕文		

貝輪　観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	貝種	大きさ cm)		厚さ (mm) (L/S)	重さ (g)	備　考
					A(L/S)	B(L/S)			
22	49	縄文晩期A地点付近	表採	オオツタノハ	2.0/1.8	10.0/7.5	0.5/0.4	62.7	未製品か

石器　観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	石材	備考
22	50	2012-1Tr	Ⅳ	打製石鏃	1.9	1.4	0.3	0.6	頁岩	
22	51	2012-1Tr	Ⅱ	磨製石鏃	3.3	3.5	0.6	6.5	粘板岩	
22	52	2012-1Tr	Ⅱ a	磨製石斧	8.7	3.8	1.0	33.0	ホルンフェルス	
22	53	2012-1Tr	Ⅳ	石匙	7.7	2.8	0.7	19.2	頁岩	
22	54	2012-1Tr	Ⅳ下部	フレーク	6.0	3.7	1.0	15.9	砂岩	
22	55	2012-1Tr	Ⅳ下部	磨石	4.6	5.4	2.7	93.5	砂岩	
22	56	2012-1Tr	Ⅳ下部	磨石	5.9	5.5	3.9	135.8	砂岩	
22	57	2012-1Tr	Ⅳ	磨石	4.9	8.0	3.7	207	変成砂岩	
22	58	2012-1Tr	Ⅳ下部	敲石	7.9	5.4	4.3	214	砂岩	
22	59	2012-1Tr	Ⅳ下部	敲石	5.1	7.0	3.0	135.4	砂岩	
22	60	2012-1Tr	Ⅳ下部	敲石	13.7	6.3	5.0	585	砂岩	
22	61	2012-1Tr	Ⅳ	敲石	5.7	4.7	2.6	86.1	砂岩	
22	62	2012-1Tr	Ⅳ	敲石	5.4	3.2	2.0	51.4	砂岩	
22	63	2012-1Tr	Ⅳ	敲石	5.7	5.6	4.1	160.8	砂岩	
23	64	2012-1Tr	Ⅳ	敲石	3.4	5.1	2.6	53.6	砂岩	

第4節　自然遺物

1．調査の概要

対象となるのは2011-1，2011-2トレンチ，2012-1トレンチの3箇所で，遺物包含層Ⅱ～Ⅳ層で出土した貝類遺体，脊椎動物遺体等である。

分析資料は発掘調査時におけるピックアップ法もしくは調査に伴う排土を2mmメッシュフルイにかけて回収された資料と，持ち帰った土壌サンプルを2mmメッシュフルイにかけた後，ウオーターフローテーションにかけて回収した資料である。詳細については，トレンチ及び層別に記載する。

2．出土状況

（1）2011-2トレンチ　Ⅱ層

確認できる貝類遺体は以下のとおりである。

ハマグリ，オキシジミ，カキ類，アマオブネ，イボニシ，イシダタミ，ヒザラガイ，ニシキウズガイ類，イタヤガイ類，イボアナゴ類，マイマイ類

ハマグリが非常に多くみられるが，すべて欠損している状態である。その他，欠損により判別できないが巻貝の殻軸や蓋もいくらかみられることから，イシダタミ等の巻貝も存在すると考えられる。その他の貝については，ごく少量である。

貝類に比べ，脊髄動物遺体等の出土量は少量である。確認できる脊椎動物遺体等については以下のとおりである。

カニ類，サメ類，ブダイ科，獣骨片

ブダイ科の咽頭歯，サメ類の歯，カニ類の爪等が出土している。獣骨片も出土しているが，小片で判別出来なかった。獣骨の中には焼成により黒色化しているものもみられる。

（2）2011トレンチ（土壌サンプル）　Ⅱ層

サンプリングした土壌をウオーターフローテーションを行って回収した資料である。

確認できる貝類遺体は以下のとおりである。

ハマグリ，オキシジミ，クボガイまたはクマノコガイ，レイシ類，ヒザラガイ類，マイマイ類

確認できる脊椎動物遺体については以下のとおりである。

ブダイ科，獣骨片

2011-2トレンチⅡ層と組成は類似し，貝類はハマグリが非常に多く，脊椎動物遺体は少量の出土であった。

（3）2011トレンチ　Ⅱa層

確認できる貝類遺体は以下のとおりである。

ハマグリ，オキシジミ，イシダタミ

脊椎動物遺体は獣骨片1点のみである。

（4）2012-1トレンチ　Ⅱ層

確認できる貝類遺体は以下のとおりである。

ハマグリ，オキシジミ，ハイガイ，カキ類，アマオブネ，イボニシ，イシダタミ，クボガイまたはクマノコガイ，オオツタノハ，テツボラ類，エガイ類，タカラガイ類，カサガイ類

最も多い貝はハマグリであるが，巻貝類やカキ類も多く見られる。ハマグリは大きな個体もみられ，殻高8cmを越えるものもある。

貝類に比べ，脊椎動物遺体等の出土量は少量である。確認できる脊椎動物遺体等としてブダイ科やサメ類の歯，ウニの他，モクズガニと思われる爪も出土している。欠損しているが獣骨片も出土している。

（5）2012-1トレンチ貝溜まり3　Ⅱa層

トレンチ北部のⅡa層で検出された貝溜まりである（第17図）。貝類が最も多く，脊椎動物遺体や礫の他土器も含まれる。

確認できる貝類遺体は以下のとおりである。

ハマグリ，オキシジミ，マガキ，アマオブネ，イシダタミ，ホソスジテツボラ，スガイ等

貝類に比べ，脊髄動物遺体の出土量は少量である。確認できる脊椎動物遺体については以下のとおりである

サメ類，イノシシ

最も多いのはハマグリで，殻高7cmを越える大きな個体もみられる。サメ類は椎骨が2点（B1，B2），歯が1点（B3）出土している。歯はアオザメ科もしくはミズワニ科の可能性がある。その他，

イノシシの右上顎骨が1点（B4）出土している。

（6）2012-1 トレンチ貝溜まり4　Ⅱb層

貝溜まり3の南側に位置するⅡb層検出の貝溜まりで，確認できる貝類遺体は以下のとおりである。

ハマグリ，オキシジミ，カキ類

ほとんどハマグリで，中には殻高7cmを越える大きな個体もみられる。少量，獣骨片を含む。

（7）2012-1 トレンチ　Ⅲ層

確認できる貝類遺体は以下のとおりである。

ハマグリ，カキ類，アマオブネ，イボニシ，イシダタミ，スイショウガイ，カサガイ類，ニシキウズガイ類，タカラガイ類

ハマグリが多く，殻高7cmを越える大きな個体もいくらかみられる。

貝類に比べ，脊椎動物遺体等の出土量は少量である。確認できる脊椎動物遺体等については以下のとおりである。

ウニ，サメ類，ブダイ類，獣骨片

サメ類の歯が数点出土しており，アオザメ科もしくはミズワニ科の可能性がある。

（8）2012-1 トレンチ　Ⅲa層

Ⅲa層からも少量であるが貝類・脊椎動物遺体が出土している。貝は1点巻貝片が出土しており，テツボラ類と思われる。脊椎動物遺体は2点小片が出土している。

（9）2012-1 トレンチ　Ⅲb層

Ⅲb層からも少量であるがハマグリ，カキ類が出土している。

（10）2012-1 トレンチ　Ⅳ層

Ⅳ層からも少量ではあるが貝類，脊椎動物遺体が出土している。

確認できる貝類はハマグリ，脊椎動物遺体はブダイ科の咽頭歯，獣骨片である。サメ類の歯も多く，大きさは0.2～1.8cmで形状はキバ状のものが多く，その他鋸歯のある切歯もみられる。

（11）2012-1 トレンチ　Ⅳ層下部

Ⅳ層下部からも少量出土しており，サメ類の歯，獣骨片がみられる。

（12）東側（縄文時代晩期）地点　表採

縄文時代晩期の調査地点周辺での表採品である。

ムラサキインコガイ，サメ類（椎骨），シカ（角片）で，サメ類の椎骨は縄文時代前期の調査地点出土のものが径1cm程度であるのに対し，径約2～3cmと大きい。

3．まとめ

自然遺物はⅡ～Ⅳ層まで出土しているが，2011 Ⅱ層，2012-1 トレンチⅡ層，Ⅱa層，Ⅱb層からの出土が最も多く，Ⅳ層はごく少量であった。特に2012年の調査では自然遺物が集中する貝だまりが4箇所検出されている。2011 トレンチⅡ層と2012 トレンチⅡ，Ⅱa，Ⅱb層は曽畑式土器が出土しており，同時期であると考えられる。

（1）貝類遺体について

貝類遺体の組成については，層による出土状況の相違はほとんどなく，ハマグリが最も多く，クボガイ類やアマオブネ，イシダタミ，カキ類等がみられた。そのため，潮間帯干潟に生息するハマグリを主体とし，岩礁潮間帯や転石に生息するクボガイ類やアマオブネ，イシダタミ，カキ類等で構成されているといえる。縄文時代晩期調査地点での食用貝類遺体の優占種組成「イシダタミが50％を占め，ムラサキインコが20％程度，ベッコウガサ・アマオブネが5％程度」（黒住 2011）に対し今回の調査地点では，ムラサキインコは確認されず，イシダタミやアマオブネが少量ながら一定数出土し，ベッコウガサもわずかに確認できる。

また，Ⅱ層でオオツタノハが1点出土している。調製痕等はみられない。なお，縄文時代晩期の調査地点でオオツタノハ未製品を1点表採している。殻頂部が欠損しており，敲打による可能性が考えられる。磨痕等の調整はみられない。

Ⅱ層からは小片ではあったが，陸産貝類のマイ

マイ類が数点確認された。

（2）脊椎動物遺体等について

脊椎動物遺体等の組成については，層による出土状況の相違はほとんどない。出土量としては2012Ⅱ層相当層が最も多く，Ⅳ層でも多い。いずれも状態の良いものは少なく，獣骨はすべて欠損した小片である。組成状況としてブダイ科の咽頭歯やサメ類の歯の比率が高いのも残存しやすかったためと想定される。

サメ類の歯の大きさは0.2～1.5cm前後で，エナメル部分のみ残存しているものも多い。細長くキバ状のミズワニ科またはアオザメ類と思われる歯が大半で，メジロザメ科と思われる鋸歯状の歯もみられる。径1cm程度のサメ類の椎骨も数点確認されている。獣骨は破片が多く判別できないものが多かったが，1点イノシシの右上顎骨が出土している。その他，カニ，ウニのトゲが出土している。

（3）考察

自然遺物の出土状況より，貝類は砂泥干潟のハマグリを中心に，岩礁等に生息するクボガイ類やイシダタミ，アマオブネ等を採集していたと考えられる。遺跡の立地する海岸は南種子町で最も長い砂浜で，太平洋に面し比較的海流が早く遊泳には適さない。今回の調査地点を流れる開語川は蛇行しながら郡川に合流し，そのまま海に至る。この河口付近に小規模ではあるが，岩礁が発達している。現在，当海岸でハマグリ採集を行わないが，地元の古老の中には，大潮の干潮時にハマグリの採集をしたと話をして下さる方がいた。貝類については遺跡周辺で比較的簡単に採集できる貝類で構成されていると考えられる。

一方，脊椎動物遺体については，岩礁やサンゴ礁域に生息するブダイ科や外海のサメ類が出土していることから，活発に漁を行っていたと考えられる。また，イノシシ等の陸上動物の狩猟も行っていたことが分かる。

一陣長崎鼻遺跡縄文晩期地点では，貝類，脊椎動物遺体ともに多量でバリエーションに富んだ種類が出土したが，今回調査した縄文時代前期地点は晩期と比較すると量，種類ともに少ない。調査面積等条件の差異を加味しても，時代による環境の違いや砂丘頂部と河川沿い低部という保存状況の違い等，様々な要因があると想定される。

今回，整理期間の関係上，縄文時代晩期地点で出土した自然遺物を参考に同定や分析を行った。縄文時代前期の環境を考える上で重要な資料であるため，機会があれば改めて，より詳細な分析を行いたい。

（註）貝類の同定については黒住耐二氏に，脊椎動物遺体の同定については樋泉岳二氏にご教示いただいた。

（引用文献）

奥谷喬司 1983「日本の貝」自然観察シリーズ18 株式会社小学館発行

久保弘文・黒住耐二 1995「沖縄の海の貝・陸の貝」（有）沖縄出版

黒住耐二 2011「第6節一陣長崎鼻遺跡出土の貝類遺体」『一陣長崎鼻遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（17）

樋泉岳二 2011「第7節一陣長崎鼻遺跡から採集された脊椎動物遺体」『一陣長崎鼻遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（17）

第５節　一陣長崎鼻遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

一陣長崎鼻遺跡は、鹿児島県南種子町中之下3784番地(北緯130° 55′ 54″、東経30° 22′ 15″）に所在する。測定対象試料は、2012-1 トレンチ4層出土土器付着炭化物（No.1：IAAA-123184）1点である（表1)。炭化物が付着していた土器は轟B式と見なされている。

2　測定の意義

土器（轟B式）の年代を知る手掛かりとする。

3　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（2）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。

（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（6）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C 濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）δ ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977)。^{14}C 年代は δ ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ ＝ 68.2%）あるいは 2 標準偏差（2 σ ＝ 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっ

ても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

2012-1トレンチ4層出土土器付着炭化物No.1の^{14}C年代は6300±30yrBP、暦年較正年代（1σ）は5315～5226cal BCの間に2つの範囲で示される。

轟B式は鬼界アカホヤ（K-Ah）降灰（町田，新井編2003によれば7.3千年前）以降に位置づけられている。また、轟式土器に関する年代測定事例（柴畑2008）を参照すると、轟B式として明示された最も古い値は^{14}C年代で6170±50yrBPである。今回の測定結果は、K-Ah降灰に近い時期で、轟B式に関してこれまで報告された値よりも若干古い値となっている。

試料の炭素含有率は57%の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

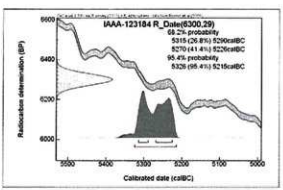
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

柴畑光博 2008 轟式土器，小林達雄編，総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション，328-335

町田洋，新井房夫編 2003 新編火山灰アトラス［日本列島とその周辺］，東京大学出版会

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibrution curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C days, Radiocarbon 19(3), 355-363



測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C(‰)(AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-123184	No.1（遺物番号：P93）	2012-1トレンチ4層	土器付着炭化物	AaA	-25.59±0.47	6,300±30	45.64±0.17

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-123184	6,310±30	45.59±0.16	6,300±29	5315calBC-5290calBC(26.8%) 5270calBC-5226calBC(41.4%)	5326calBC-5215calBC(95.4%)

第6節　まとめ

一陣長崎鼻遺跡は，昭和30年に発見され，翌年の調査で黒川式土器と共伴して種子島最古の人骨が検出された遺跡である。今回，河川沿いの低地に新たに縄文時代前期前半の包含層が存在することが明らかとなった。

遺物包含層はⅡ～Ⅳ層の3層にわたる。Ⅱ層は自然遺物が多く出土し，調査区及びその周辺で貝溜まりが4箇所検出されている。遺物はⅣ層及びⅣ層下部で多く出土している。

1．出土土器について

文様によりⅠ～Ⅶ類に分類した。

Ⅰ類は直行する口縁部の下部もしくは胴部にミミズバレ状突帯を1～数条施すもので，轟B式土器である。概ね調査最下層のⅣ層下部で出土している。

Ⅱ類は口縁下部もしくは胴部にミミズバレ状突帯を施すが，Ⅰ類に比べミミズバレ状突帯が厚ぼったく，指やヘラで両端を強くつまんで貼り付けており，突帯の断面が三角形を呈する。轟B式土器で，Ⅱ～Ⅳ層下部と出土範囲も広い。

Ⅲ類は横位に棒状工具で刻目を1～数条施す土器である。器形は口縁部が内湾するものや胴部が緩やかな「く」の字状を呈するものもある。突帯がなく刻目のみを施しているもので，島根県の西川津遺跡から出土する土器に類似している。概ねⅣ層もしくはⅣ層下部で出土している。

Ⅳ類は粘土紐を貼り付けた後，棒状工具で刻み目を入れた，刻目突帯と沈線を組み合わせている。最も出土量が多く，文様もバリエーションに富む。器形も単純な深鉢と肩が直角もしくは「く」の字状に屈曲するものがある。Ⅲ類同様，島根県の西川津遺跡から出土する土器に類似している。出土範囲はⅡ～Ⅳ層と幅広く出土している。

Ⅴ類は外面に短い押引文を施す土器である。図化しなかった小片を含めⅢ～Ⅳ層から出土している。西川津系土器の範疇であると考えられる。

Ⅵ層は，細い粘土紐を貼付けた微隆突帯を横位に巡らせる土器である。指やヘラで両端を強くつまんで貼り付けており，突帯の断面が三角形を呈するもので，轟B式の範疇であると考えられる。Ⅱ層からの出土である。

Ⅶ層は棒状工具により幅広の沈線を施す土器で，曽畑式土器である。Ⅱ層からの出土である。

調査地点が砂丘で河川に近接する状況ということもあり，多少の混在はあると思われる。しかし，Ⅱ層とⅢ層の間にはデューンロックが堆積していた。デューンロックは，地表砂が石灰質により固化する現象で，Ⅱ層とⅢ層は明確に分層できる。そうした堆積状況も加味して土器の変遷を考察する。

ミミズバレ状突帯はⅡ～Ⅳ層まで出土しているが，Ⅳ層下部で口縁部周辺もしくは胴部に数条巡らせる大型の甕を主体とし，その後突帯が肥大化し，Ⅱ層で微隆突帯へと変遷する。一方，屈曲形をもつⅢ類の刻目土器はⅣ層，刻目突帯をもつⅣ類はⅢ～Ⅳ層を主体とする。

こうしたことから，ミミズバレ状突帯を口縁部・胴部に数条巡らせる大型の深鉢が先行し，厚ぼったいミミズバレ状突帯が一部共伴しながらも刻目や刻目突帯をもつ屈曲形が主流となる。その後，微隆突帯をもつ土器が並行しつつ曽畑式土器へと変遷していくと考えられる。

なお，この時期の編年には諸説あるが，今回の変遷は一陣長崎鼻遺跡出土資料をもとに出土層と分類から判断したものであることを記したい。

轟B式土器は九州を中心にその分布域は広範囲にわたり，北は山陰地方を越え福井県さらには海を渡った韓半島でも出土している。種子島でも西之表市下剥峯遺跡，東方ノ平遺跡，泉原遺跡，中種子町大園遺跡，千草原遺跡，三角山Ⅰ遺跡，南種子町赤石牟田遺跡，上平遺跡など多数の出土例がある。中でも上平遺跡は発掘調

査で深鉢形，屈曲形の出土した遺跡であり，その詳細を記載する。上平遺跡は同じ南種子町の遺跡で，東海岸側の標高約115mの南東に緩やかに傾斜した台地上に位置する。轟B式土器はアカホヤ火山灰直上の，アカホヤ火山灰が混じる砂質土Ⅱ層から出土している。轟B式土器はミミズバレ状突帯をもつ深鉢形のほか，刻目や刻目突帯と沈線，微粒突帯を組み合わせる西川津系の屈曲タイプが出土している。また，一陣長崎鼻遺跡ではほとんど出土していない，刻目突帯に押引文や沈線を組み合わせた西川津系の土器も多く出土している。

深鉢形と屈曲形については，時期差によるものとする説（田中 1980，栗野 1982，山口 1987，矢野 2002），二者の系譜を認めた上で共存しながら変遷したとする説（宮本 1989,1990），別系統とする説（高橋 1989,2004），単純形を2時期に分け，屈曲形を間に組込む説（柴畑 2002,2008）等諸説あり，その編年も様々である。一陣長崎鼻遺跡では，Ⅲ層にわたり轟B式土器が出土しており，また深鉢形と屈曲形が共伴して出土している。今回の出土資料が今後の研究に資することを期待したい。

2．土器の放射性炭素年代について

今回，1点のみではあるが，2012-1トレンチⅣ層下部出土土器（遺物番号：3）の付着炭化物の放射性炭素年代の測定を行った。^{14}C年代は6300±30yrBP、暦年較正年代（1σ）は5315～5226cal BCの間に2つの範囲で示される。轟式土器の^{14}C年代測定データ（柴畑 2008）を参照すると，最も古い轟B式土器のデータは仁田尾中B遺跡の土器付着炭化物で6170±50yrBPで，これまで報告された値よりも若干古い値となっている。遺跡が海浜地で測定土器が1点のみであったことから，参考までにとどめたい。

3．出土石器について

Ⅱ層から磨製石鏃1点，磨製石斧1点出土した他はすべてⅣ層からの出土である。砂岩の磨石，敲石が大半を占めるが，石鏃や石匙など狩猟に伴う石器がみられることは，自然遺物にイノシシ等の獣骨が含まれていることからも妥当である。

4．自然遺物について

Ⅱ～Ⅳ層で貝類を中心とした自然遺物が出土した。Ⅱ層に集中し，貝溜まりもみられた。その主体はハマグリで，その他岩礁に生息するクボガイ類やカキ類，イシダタミ，アマオブネ等もみられる。貝については遺跡周辺で採集活動を行っていたと考えられる。一方脊椎動物遺体は岩礁やサンゴ礁域に生息するブダイ科や外海のサメ類が出土しており，活発に漁を行っていたと考えられる。

5，総括

今回の調査で河川沿いの低地部に轟B式土器を主体とする縄文時代前期前半の遺跡が存在することが確認できた。縄文時代前期は，早期と比べて種子島では遺跡数も少なく不明な点も多い。轟B式土器が層序立てて出土した一陣長崎鼻遺跡の資料が，当時の様相を知る上でその一助となることを期待したい。

また，縄文時代晩期同様，前期にも貝塚を形成していたことが明らかとなった。貝類，脊椎動物遺体の組成をみると，ハマグリが多く脊椎動物遺体の出土量が少ないなど，出土量の関係もあり種類等の差異はあったものの，組成も類似していたことは興味深い。

縄文時代前期の一陣長崎鼻遺跡は，聞語川が蛇行しながら遺跡沿いに流れている。そのため，川の増水等自然災害による被害が危惧される。今回，調査終了後に大型土嚢を設置し河川側の保護対策を行った。今回の調査は遺跡の一部を調査したのみで遺跡が周辺に拡大することは明らかである。今後は継続して遺跡保護のための状況確認を行うとともに遺跡の範囲確認や保護対策なども検討していく必要がある。

最後に，縄文時代前期の遺跡発見の契機となっ

た分布調査に同行くださった竹中先生をはじめ，お忙しい中発掘調査・報告書作成に参加・協力くださった諸先生方，学生諸君に心から感謝申し上げます。

（引用文献）

田中良之　1980「新延貝塚の所属年代と地域相」『新延貝塚』福岡県桂手町新延所在縄文貝塚の調査　桂手町埋蔵文化財調査会

栗田勝弘　1982「轟式土器について」『平草遺跡』大分県日田郡天瀬地区遺跡群発掘調査報告書　天瀬町教育委員会

山口信義　1987「隆帯文（轟B式）土器研究ノート」財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室研究紀要創刊号

高橋信武　1989「轟式土器再考」考古学雑誌 75 巻 1 号

宮本一夫　1989「轟式土器様式」『縄文土器大観 1　草創期・早期・前期』小学館

宮本一夫　1990「轟B式土器の再検討」肥後考古 7 号

柴爛光博　2002「考古資料からみた鬼界アカホヤ噴火の時期と影響」第四紀研究 41 巻 4 号

矢野健一　2002「中国地方における縄文時代早期末前期初頭の土器編年」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－上巻』古代吉備研究会

高橋信武　2004「西川津式土器と轟式土器の関係」『山下秀樹氏追悼考古論集』山下秀樹氏追悼論文集刊行会

石堂和博・徳田有希乃　2004「上平遺跡」南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（11）南種子町教育委員会

猪柴久志ほか　2005「南田代遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（88）鹿児島県立埋蔵文化財センター

柴細光博　2008「轟式土器」『総覧　縄文土器－小林達雄先生古希記念企画－』『総覧　縄文土器』刊行委員会

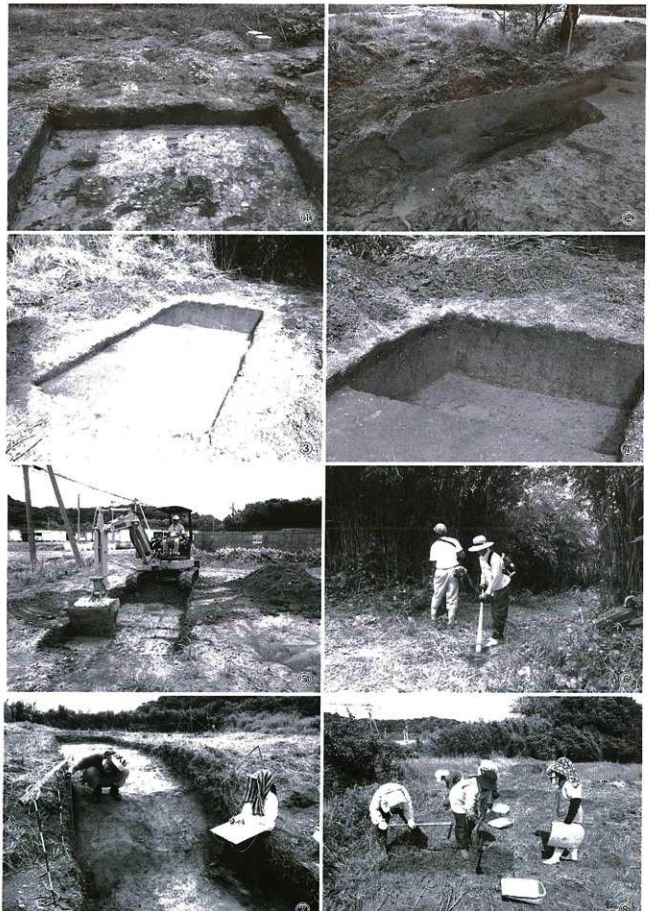
堂込秀人　2008「曽畑式土器」『総覧　縄文土器－小林達雄先生古希記念企画－』『総覧　縄文土器』刊行委員会

石堂和博・松原信之　2011「一陣長崎鼻遺跡」南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（17）南種子町教育委員会

図　　版

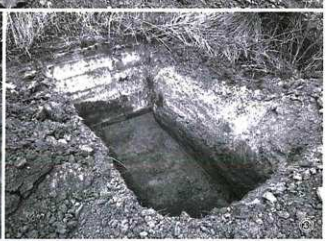
①調査前風景　②2012-1 トレンチ完掘状況　③2012-1 トレンチ土層断面　④2012-2 トレンチ完掘状況
⑤2012-3 トレンチ完掘状況

広田遺跡図版 2

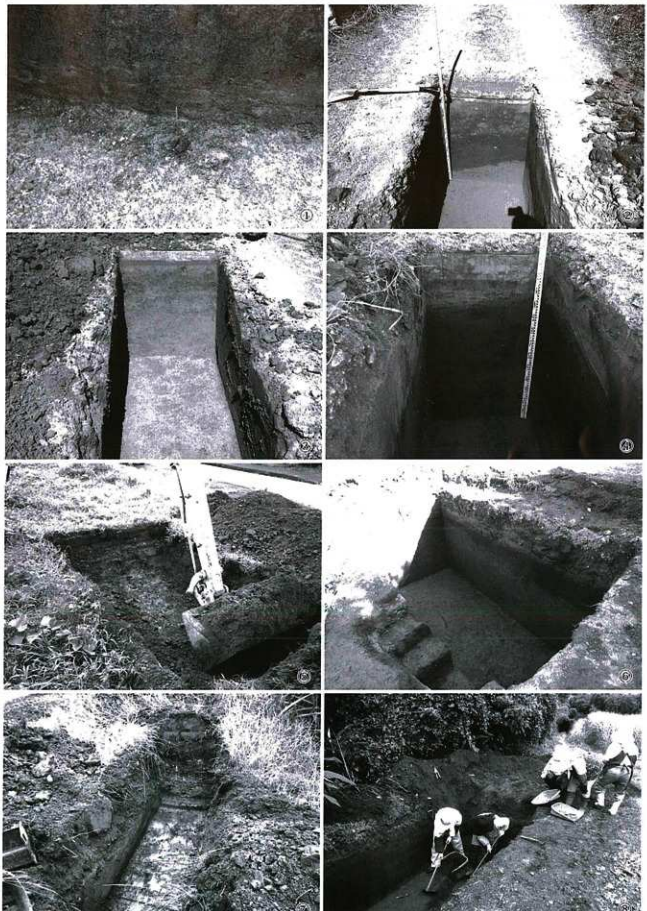


① 2012-2 トレンチ遺物出土状況　② 2012-4 トレンチ完掘状況　③ 2012-5 トレンチ完掘状況
④ 2012-2 トレンチ下層確認トレンチ　⑤ 2012-6 トレンチ完掘状況　⑥草払い状況　⑦実測風景　⑧調査風景

広田Ⅲ遺跡出土土器・陶磁器，表採土器・貝製品

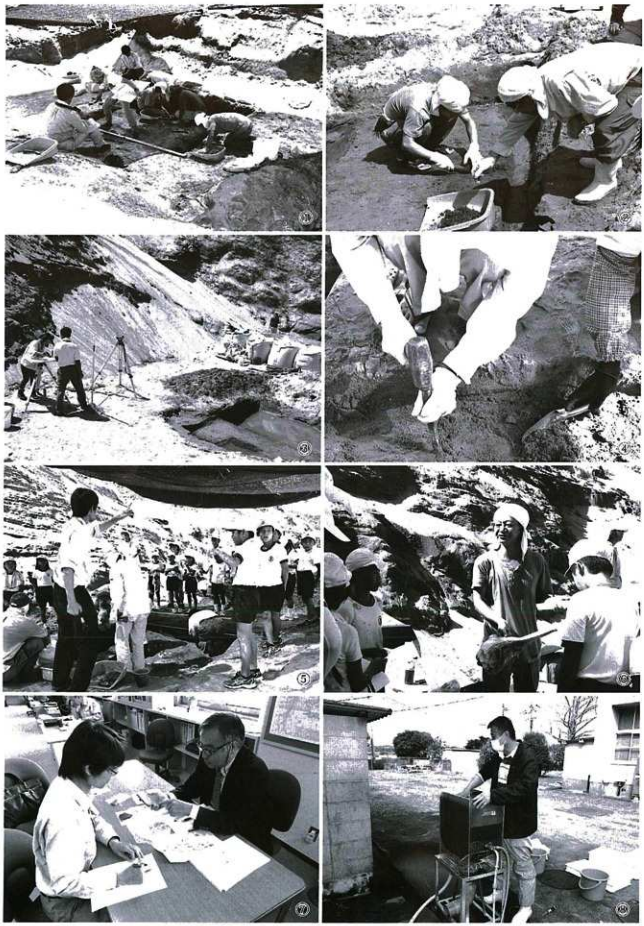


①遺跡近景　② 2012-8-1 トレンチ完掘状況　③ 2012-8-2 トレンチ完掘状況　④ 2012-8-3 トレンチ完掘状況
⑤ 2012-8-4 トレンチ完掘状況



① 2012-8-4 トレンチ遺物出土状況（噴礫層） ② 2012-8-5 トレンチ完掘状況 ③ 2012-8-6 トレンチ完掘状況 ④ 2012-8-6 トレンチ土層断面 ⑤ 2012-9-1 トレンチ試掘状況 ⑥ 2012-10-2 トレンチ完掘状況 ⑦ 2012-10-3 トレンチ完掘状況 ⑧調査風景

一陣長崎鼻遺跡図版 1

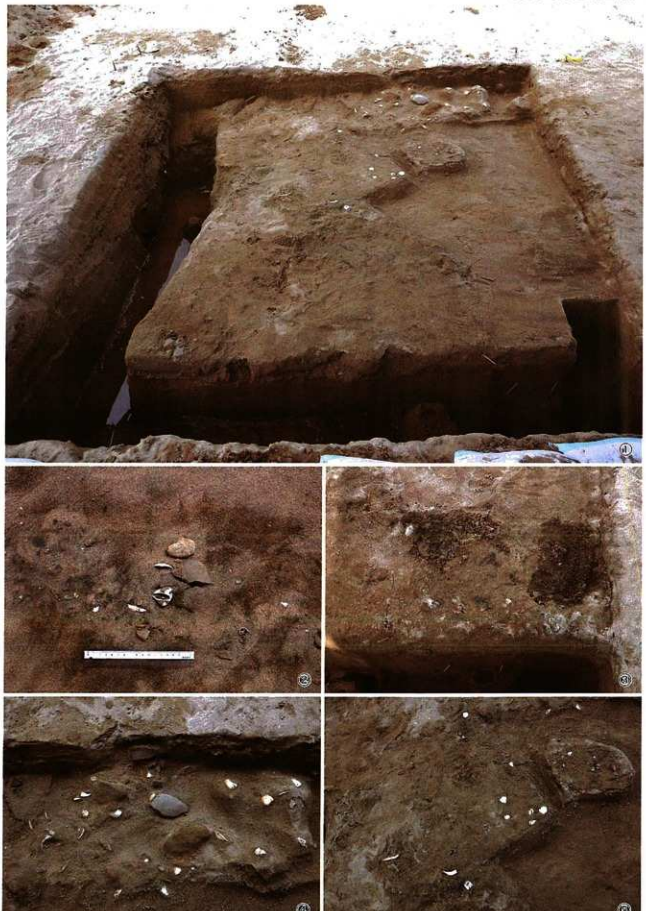


①発掘調査風景　②自然遺物コラムサンプリング状況　③実測風景　④Ⅱ層掘り下げ状況（Ⅱ層下位のデューンロックを割りながら掘り下げを行う）　⑤町内小学校遺跡見学１　⑥町内小学校遺跡見学２　⑦土器指導状況　⑧ウォーターフローテーション

①遺跡近景（右端の大型土嚢の部分が調査地点）　②遺跡近景（手前側が縄文時代前期の調査地点，左奥が縄文時代晩期の調査地点）

一陣長崎鼻遺跡図版 3

①調査前　②2012-1 トレンチ西壁土層断面自然遺物コラムサンプリング状況　③2011-2 トレンチ西壁土層断面
④2012-1 トレンチ西壁土層断面　⑤2012-1 トレンチ南壁土層断面



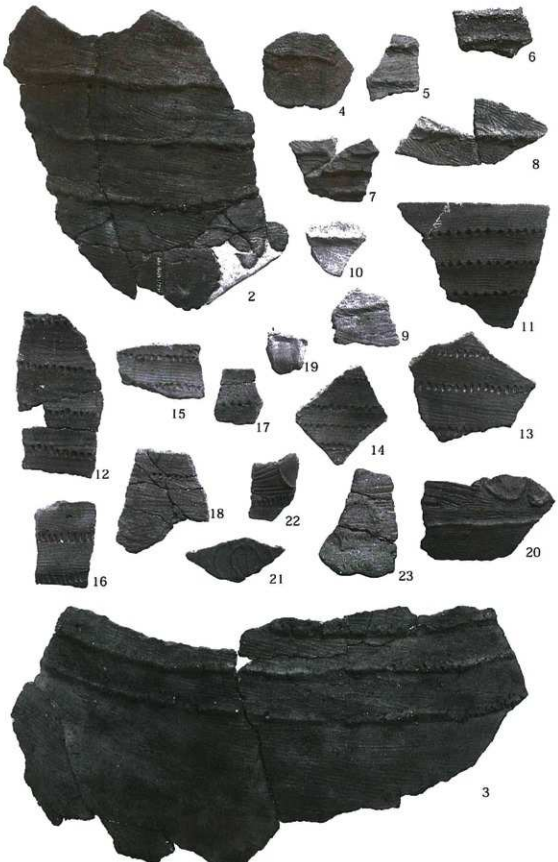
①2012-1 トレンチ調査状況　②貝溜まり 1　③貝溜まり 2　④貝溜まり 3　⑤貝溜まり 4

一陣長崎鼻遺跡図版 5

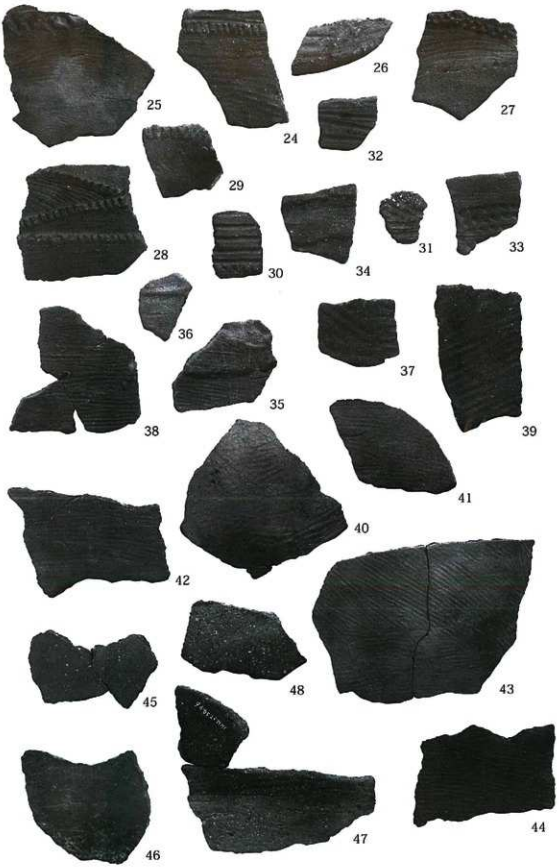
①Ⅲ層遺物出土状況　②Ⅳ層遺物出土状況　③Ⅳ層下部放射性炭素年代測定土器（P3）出土状況
④Ⅳ層下部放射性炭素年代測定土器（P3）炭化物採取状況　⑤Ⅳ層下部遺物出土状況

1

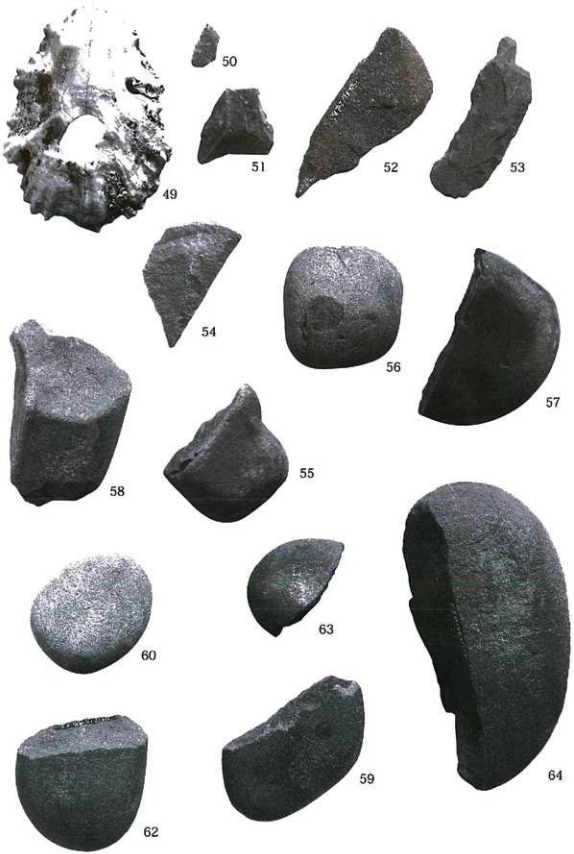
一陣長崎鼻遺跡出土土器（1）



一陣長崎鼻遺跡出土土器（２）



一陣長崎鼻遺跡出土土器（3）



一陣長崎鼻遺跡貝製品・石器

南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（18）

広田Ⅲ遺跡・横峯Ｂ・Ｆ遺跡・一陣長崎鼻遺跡

－平成 24 年度町内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査報告書－

発行日　2016 年 3 月

発行者　南種子町教育委員会

〒 891-3792

鹿児島県熊毛郡南種子町中之上 2793-1

℡ 0997-26-1111

印刷所　（有）種子島新生社印刷

〒 891-3101

鹿児島県西之表市西之表 16736-1

℡ 0997-22-0476